

天龍川流域の村々

松澤 武

目 次

はじめに……………	3
一、中世の伊那谷……………	3
(一) 小豪の群立……………	3
(二) 中世の郷と村……………	8
1 古い時代の郷……………	8
2 鎌倉時代の郷村……………	10
3 中世末期の郷村……………	13
二、天正の検地と徳川氏による分割支配……………	20
(一) 天正の検地……………	20
(二) 徳川氏による分割支配……………	24
三、伊那谷の村々……………	25
(一) 大型村と小型村の区分……………	25
(二) 江戸時代中期における大名領の様子……………	28
(三) 大型村……………	33
1 大型村の位置……………	33
2 片桐村……………	33
3 島田村……………	35
(四) 小型村といわれる村々……………	37
1 小型村の範囲と位置……………	37
2 小型村の一人百姓……………	38
3 連合村および組合村……………	39
(五) 明治八年の合併……………	43
四、伊那谷における江戸時代末期の村おわりに……………	45
おわりに……………	50

## はじめに

伊那谷は中央を天竜川が貫いて流れ、東には南アルプス（赤石山脈）、西には中央アルプス（木曾山脈）が屏風のようにそびえ、南北に長い帯状の地形となっています。長野県内には古くからその地方の特徴をよく言い現わした呼び方で、例えば佐久平・善光寺平・松本平・安曇平（又は安曇野）などと呼ばれています。天竜川の沿岸と木曾川沿岸部だけは伊那谷・木曾谷といわれ、けっして伊那平とか伊那盆地とは呼ばれていません。これは上下伊那は天竜川本川や数多い支流によって構成された谷々の集まりであるとともに、伊那そのものが大きな谷を形成しているからであります。

数多い支流は小さな谷あいや扇状地を形作り、そこに点在する村々はどうしても小型のものになります。伊那谷の村はその地形ゆえに、小型の村々が寄り集まってできてきたということができません。

そしてこの伊那谷は、古く縄文・弥生時代より人が住み着き、長い間営々と生活の営みを続けて現在に至っているわけです。この稿では、中世の末期から江戸時代、幕藩体

制が崩れた明治の初期までの村の様子をみていくことにします。

### 一、中世の伊那谷

#### (一) 小豪族の群立

鎌倉・室町期の伊那谷の村の様子を見ると、細かく区切られた伊那谷の地形の影響を多分に反映していることが分かります。伊那谷の村は小さな谷々に分かれていたもので、外来者であった小笠原氏は別として、古くから伊那谷全部を完全に掌握するような強力な支配者層は出てきませんでした。鎌倉時代下伊那を中心にして支配した江馬北条氏はさておいて、戦国時代も末期になると正に小土豪の寄り集まりの状態を呈しています。

そのような中で上伊那の主な支配者層を上げてみますと、北部では高遠の高遠氏（諏訪氏）、箕輪福与城の諏訪千野氏系の藤沢氏があり、それ以外の豪族は小笠原氏の影響を強く受けていました。

在地の小土豪（地侍層）の様子を見ると、小野の草間氏は小笠原氏に、笠原・黒河内・溝口・保科氏など三峰川沿いの者達は高遠氏（諏訪頼継）の影響下にあったようです。上伊那北部の豪族の内、大身の松島・大和・長岡・小河内・

福島・木下氏をはじめ、野口・手良・ハツ手・大出・高木・辰野・宮木・神戸・赤羽・樋口・有賀・漆戸の諸氏は福与の藤沢氏（藤沢頼親）に属しており、天文一四年（一五四五）には、皆箕輪城に立てこもって武田氏と戦っています（小平物語）。このほか上伊那南部の上穂・飯島・伊那部・殿島・宮田・小田切・赤須・岩間氏等は小笠原氏に属したり、その時々状況により複雑な動きを見せておりました。また、上伊那の最南端の船山城には、南信濃源氏の有力者である片切氏が付近の地侍をひきいて拠っており、上伊那一帯が統一して行動がとれる状況にはありませんでした。

ここで、上伊那における地侍などの勢力範囲といえますか、支配高を見る必要があります。今まで上げた支配者層や地侍などはいずれもその在地名を名乗っておりますから、その所在地はわかります。当時は石高制ではなく貫文制を取っていましたが、全村の貫文高が明文化されていたわけではありませんので、確実なところはわからないというのが実情です。

ここで貫文制について『日本歴史辞典』で見ますと、「一貫文は米二石ほどを納める田畑のこと。江戸時代初期太閤検地以後の石高でいうと、一貫文は約五石の収穫のあ

る田畑、面積として三反三〇四畝」とあります。また、『南信伊那史料』には、「応永の始めより貫銭率を定め、徴税知行割など、永何百拾貫文と称す。然れども其法相同うせず、国・郡・土質の厚薄または領主の緩急に依りて多少の差異あり。既に下条領にては其頃一坪を一文とし、千坪を一貫文とし、但し、下民の願いに依りて一貫文の代米二石五斗収めの例を用いたるが如きこと細見記に見えたり」としています。

当時伊那全部は通計四八、〇〇〇貫といわれており、太閤検地では一〇〇、六三三石余となっていますので、それから見ると、一貫文を五石の収穫量で換算すると約二四〇、〇〇〇石余になり、下条領の納入量では約一二〇、〇〇〇石となり計算が合いません。このことを頭に入れておいていただき次の話に移りたいと思います。

上伊那北部で一方の有力旗頭であった箕輪福与城主藤沢頼親は、享禄・天文の頃、箕輪六〇〇〇貫文を領有したといわれております。またその旗下の松島信晴・信久親子は五〇〇貫文を領有したといえますので、この当時の地侍層としてはやはり大身の部類に入るのでしょう。この他、上穂氏は武田侵攻の時武田氏に下り、知行一八〇貫文を与えられています。

次に自身の地侍を見ると、当時飯島城付属の郷士では、飯島丹後二〇貫文、平沢左近一八貫文、林三左衛門一五貫文、宮下但馬一八貫文、和田金右衛門一五貫文、中平兵部少輔二三貫文となっていて、いずれも天正一〇年（一五八二）武田家滅亡の時、主家の飯島氏と共に没落しています。

下伊那は上伊那と趣を少し変えていて、全体的に中位土豪が数多く分布しており、そしてその各々が配下の地侍を率いて相争っていました。その様子を上流側から見てもみすと、大島台城には、片切氏系の大島氏、吉田には奥州の安部氏系の松岡氏、飯田には小笠原氏系の坂西氏、松尾には小笠原氏、そして隣の鈴岡に同じ一族の小笠原氏、下条吉岡に小笠原氏系（異説多し）の下条氏、新野の日差城には伊勢平氏系の関氏がいて、各々がその勢力の拡大を図っていました。

一方、川東（竜東）の様子を見ると、小渋川流域の大河原上蔵には、滋野氏系の高坂氏がいました。高坂氏は、南北朝時代に宗良親王を守り活躍した高坂高宗以来の名家です。河野以南遠山川辺りまでをその配下に入れていた知久氏は諏訪系（または南信濃源氏系とも言う）で、知久の神峰城に蟠踞していました。また遠山郷を支配下に入れてい

た遠山氏が和田城に拠り、それぞれその地域の地侍を率いていました。

下伊那のこれらの諸氏の領有高はどの位であったのか、現在では上伊那同様確実なところは分かっていませんが、その中でも分かっている範囲でその一部を挙げると、次のとおりです。

小笠原氏の松尾領は通称八〇〇貫文とされておりましたが、後に下条氏に一部を押領され、五〇〇貫文に減少したといわれています。青表紙（太閤検地の際の検地帳、表紙が青紙であったのでこう呼ぶ）には松尾領として次の村々を挙げています。

島田、毛賀、長熊、一色、駄科、上殿岡、下殿岡、桐林、時又、上川路、下川路、下瀬、伊豆木、竹佐、中村、久米、光明寺、大瀬木、羽生野、三日市場、山村、北方（以上二二ヶ村、一二、四四一石四斗六升六合三勺）

これを見ると当時の松尾領の範囲をおよそ推察することができます。

新野の関氏は、伊那の二九ヶ村、三河の七ヶ村を併せて計三六ヶ村、高三〇〇貫文といわれました。そしてその領域は次の村々とされています。

新野、向方、帯川、日吉、和合、坂部、松島、長沼、福島、和知野、平久、早稲田、井戸、神子谷、中谷、川口、鷲巢、浅野、鴨目、荒木田、梅田、粟野、平谷、尾野、小供、平石、大那木、大桑、門原、三河の国に根羽、月瀬、津具、坂場、佐分渡、黒川、粟瀬又座光寺氏は応永年間（一五二二〜一五二七）市田吉田城の松岡氏に属し、三七〇貫文三〇騎の将であったとされています。

一方、大島氏の家士の様子を見ますと、天文の頃大島一〇騎といわれ台城を支えていた者達に与えられていた貫高は、

大島太郎左衛門	(大島)	一〇貫文
大島四郎左衛門	(大島)	一六貫文
岩崎日向	(大島)	一〇貫文
矢沢豊前	(大島)	一五貫文
宮瀬東右衛門	(大島)	二〇貫文
荒井隠岐	(片桐荒井)	一八貫文
斎藤太郎左衛門	(片桐小和田)	一五貫文
下平治部少輔	(片桐下平)	二五貫文
竹村治郎左衛門	(上片桐鶴部)	二五貫文
福与因幡	(生田福与)	一八貫文

となっております。

知久氏の古い所領高（貫文高）は明確には分かりませんが、武田氏に神峰城を攻略された後、頼氏は徳川氏に寄り、本能寺の変の後、徳川氏が伊那をその版図に入れた天正一〇年（一五八二）七月、前代の旧領六、〇〇〇貫文を受けたとされています。知久頼氏が家康より受けた旧領六九ヶ村は、

川野・供野・伊久間・田村・阿島・虎岩・林・小川・知久平・富田・平島田・かか須・柏原・南原・今田・下村・きらら・まき平・をしな・雲母・大屋敷・たしから・いもの平・野池・米川・法泉寺・米峰・尾林・石林・安土・金野ばんだ・けろくぼ・松くぼ・八郎くら・下大郡・柳木ヶくぼ・ちんのくぼ・百田・上大郡・うつさわ・飽島・川島・くろみ・からかさ・高町・いな伏戸・くわとらず・ひらの・ぬたのたわ・かきの・まんば・左京・たもと・のふ・市場・ちやわら・小松倉・大畑・大くな・みさの・ぬくた・がしな・しっぺの・飯沼・上黒田・下黒田・座光寺の内上野・新井

（喬木村誌による）

となっております。ただし、飯沼より上野に至る四ヶ村は、永正年中（一五〇四〜一五二一）または天文年中（一五三

二一五五五）ともいいますが、知久頼為が飯田城主坂西伊予守政之と戦い、その領地四ヶ村約千貫文を押領したものですから、竜東における知久領はおよそ五、〇〇〇貫文であったといえます。

それでは知久氏の配下の地侍で、現在わかっている者では、

林左近亮（豊丘林） 一五貫文

虎岩平大夫（豊丘田村） 一八貫文

伴野主馬（豊丘河野） 一五貫文

羽生玄蕃光定（喬木小川）三〇〇貫文（但し応永の頃）

坂西氏から押領した分では、

斎藤善次郎（上郷下黒田） 一五貫文

北原喜兵衛（上郷下黒田） 一二貫文

篠田重監（上郷上黒田） 一七貫三〇〇文

鋤柄若狭（上郷上黒田） 一三貫文

高田主膳（上郷南条） 三〇貫文

木下源左衛門（上郷飯沼） 三〇貫文

となっております。

武田氏侵攻以前の伊那谷の支配者層とそれに連なる地侍の主な者について見てきましたが、地侍は支配者から禄を給せられて、その禄高に相応しい軍役に服するわけです。

江戸時代の役料とでも考えれば良いと思います。

このように伊那谷は地形的に小豪族が群立していたために、天文二年（一五四三）以来の武田信玄の伊那侵攻に抗しきれず、順次平定され、以後三九年間その支配下に入らざるを得ませんでした。そしてこのため小豪族および地侍の中には滅ぼされて家名を失ったもの、武田に降った後、叛逆の企てありとして誅せられたものなどがありました。しかし武田に忠節をつくして生き残ったものの多くが、天正一〇年（一五八二）の織田氏の伊那侵攻、武田氏の滅亡のときに、共に滅ぼされてしまったか、または野に下ってしまいました。

このような時代に、弘治二年（一五五六）三月、武田氏に対して謀反の企てをしたとして捕らえられ、伊那狐島で誅せられた「伊那八騎」と呼ばれた人々は、当時の伊那における先達とも言うべき人々でした。

松島豊後守信久（豊前守ともあり）、黒河内隼人、殿島大和守、溝口民部少輔、春日河内守、宮田左近、小田切帯刀正勝、上穂伊豆守

しかもこれらの人々はその出身地から見て相当の大身であったことがわかります。この八人衆が斬られた夜、黒河内隼人の家臣や村の農民らは、闇に紛れてその首級を盗み出し、

黒河内の里に葬りました。これが黒河内の八人塚であると伝えられています。

武田氏の滅亡後は、織田信長の家臣、毛利秀頼が飯田城主に封ぜられ、伊那全郡を支配しました。しかし、その年の六月に起きた本能寺の変の後は、徳川・北条両氏による伊那争奪戦が繰り返され、ついに徳川氏の支配下に入ることになりました。天正一八年（一五九〇）の小田原落城後徳川氏は関東へ移封となり、その旗下の諸将とそれに属していた数多くの地侍と一緒に関東へ移っていきました。そして再び毛利秀頼は豊臣氏の家臣として飯田城に封ぜられ、伊那全域をその支配下におさめることになったのです。

## (二) 中世の郷と村

伊那谷も中世の後期になると、数多くの村が形成されてきて、それが近世の村落につながっていくことになりました。小穴喜一氏の「惣村の用水開発」には大町市常盤の湧水による開発の例を上げてありますが、駒ヶ根市赤穂の上の井・下の井の慣行水利権届書（駒ヶ根市役所）を見ますと、これも古く、平安時代末期よりこの井水を開削して水田開発をしてきたと伝えております。

鎌倉時代も末期になると農業生産も増大し、それに伴って今までは荘園の下部組織の一つでしかなかった村落が、生産に関することや、祭礼などの行事も取り仕切るようになってきます。また中には荘園の年貢も村単位で納入する処も現われてくるようになったといえます。そしてこの頃になりますと「惣村・惣郷」といわれるようになりますが、これは共同意識で結ばれた郷や村が惣村といわれ、その上部組織のまとまりを惣郷（荘）といいました（『長野県史』）。それでは伊那谷における古くからの郷村の様子を見てみましょう。

### 1. 古い時代の郷

古い時代の郷については、大化の改新の時、伊那郡にどのような郡（評）や郷（里）が置かれ、それが以後どのように変わっていったか現在ではよくわかっていません。後の資料を見ますと、国の下に郡を置き、その下に郷を置いており、一郷は五〇戸となっていたようです。信濃国には一〇郡五七郷が置かれていましたが、現在の上下伊那郡にどのような郷が設置されていたのでしょうか（図一）。これについて現在では「倭名抄」に従うより他はないのですが、残されている「高山寺本 刊本」では、伊那郡には伴



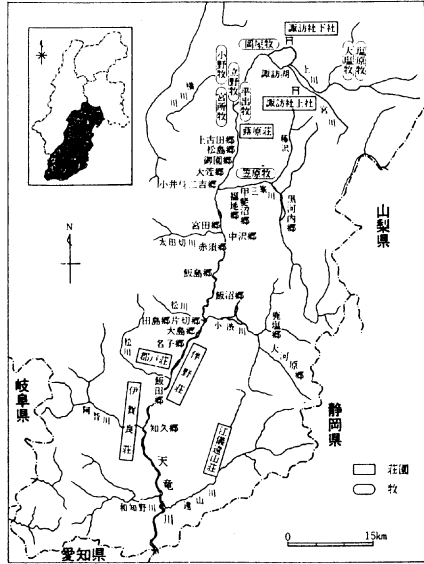


図-1 南信における公領・荘園の分布  
(長野県史通史編より)

野・小村・麻績・福智の四郷と、当時諏訪郡に含まれていた上伊那北部に佐補・美和・弓良の三郷、計七郷があったとされており、そして「流布本」には、伊那郡に輔衆を加えて、計八郷が記されています(『伊那市史』他)。

当時諏訪の勢力が強く、三峰川北岸辺まで諏訪郡が進出していったから、現在の伊那市の中心部以北は諏訪郡、それから南部が伊那郡となっていたと考ええてよいようです。それではその当時の八郷についてみてみましょう。

\* 輔衆(フス) 前にも述べたように、倭名抄の流布本のみに記載されている郷名ですが、『南信伊那史料』に

は、これを「フモロ」と読み、普通しでは「ホムラ」だから、赤穂の上穂(ウワブ)あたりであろうとあります。しかし現在ではこの輔衆郷は、後の伊賀良の荘内の地であろうとされています。

\* 伴野(トモノ) 現在の下伊那郡豊丘村伴野を中心とする竜東地方で、ここは古くから大伴部が住んでいたのがこの名が付いたとされています。そして中世に至るまでこの竜東一帯は伴野荘と呼ばれていました。

\* 麻績(ヨミ) これは現在の飯田市座光寺を中心とする一帯を指すとされています。ここは元善光寺(如来寺)縁起にも麻績郷と出ておりまし、高岡古墳も残されています。下伊那でも古くから開けたところとして知られています。

\* 福智(フクチ) 現在の三峰川の左岸、伊那市富県福地を中心とした一帯とされています。地形的に見ても古くから開けた地域であると考えられます。

\* 小村(ラムラ) この郷の位置については諸説があつて、未だ確定されていません。この郷は天竜川の右岸(竜西)、伊那市の南部地方とされ、小室・小黒川などの名がこれに関連しているとも言われます。また一説には現在の宮田村を含んで、太田切川あたりまでの広い範囲ではな

かったかとも考えられています。

これに対し一志茂樹先生の説は、現在の飯田市松尾や竜丘の台地上を中心とした地域ではなかったかとされています（『伊那市史』）。伊那市、飯田市竜丘どちらも古くより開かれた地域であり、この当時より郷があっても良いように思われる所です。

\* 弓良（手良・テラ） 当時の諏訪郡内に記されていますが、三峰川北岸の台地上、現在の伊那市手良を中心とした地域とされています。ここは三峰川を挟んで対岸の福智郷に接し、古くより帰化人が居住したとの伝承も残されているところです。

\* 佐補（左布・サフ） これも諏訪郡内に記されていますが、普通これを「サワ」と解しています。天竜川を挟んで上伊那の北部一帯の地域で、箕輪町の沢はその名残ではないかといわれています。しかし、『上伊那誌』では、一説には「左布」は「ソウ」であって「サワ」ではないとする考え方もあり、今後の研究課題であるといっています。

\* 美和（ミワ） これも前の二郷と同様、諏訪郡内分として記されていますが、現在の箕輪地域であるといわれています。北は佐補郷、東は弓良郷、南は小村郷までの範囲で、旧箕輪領と呼ばれた一帯とされ、これには異説はない

ようです。

このように伊那郡には古くから郷が設けられていましたが、伴野・麻績・福智・弓良などのように現在の地名として残されている処についてはその位置を確定することができませんが、そうでない郷についてはあくまでも推定しているわけです。またその郷の範囲について、例えば、福智郷の南限は中沢辺か、小渋川までかと論じられています。これはわからないというのが正直のところですが、

この郷は、制度としてのものであり、その後幾多の変遷をたどって中世の郷はこれと直接関係のないものになっております。

## 2. 鎌倉時代における郷村

平安時代の末期から鎌倉時代になると、伊那谷にも郷・保・村などの所領の単位が生れ、公領か荘園のどちらかに所属するようになってきました。ここでは『長野県史』を参考にしてそのあらましを見ることにします。

先ず鎌倉時代の公領を見ますと、信濃国内に計一一三ヶ所、伊那郡内には二六ヶ所あったといわれています。公領での租税負担は一般には米で納入するのが原則でしたが、信濃国は都より遠く離れていて、重い米の運搬には費用が

掛かりすぎることから、軽い麻布で納入するようになり、鎌倉時代からは代銭納に変わってきていました。平安末期の保延二年（一一三六）の宮田村の例をみますと（『長野県史』）公田一町歩当たり細布二〇反、在家一字当たり中布一反を納入し、これを官物といいました。これ以外に四年に一回の検注の代わりに納める検注物、臨時課役である一國平均役が課せられていました。そして当時の伊那郡には次のような公領が設けられていました。

- 小井弓三吉郷―春近領（伊那市西春近）
- 赤須郷―春近領（駒ヶ根市赤穂赤須）
- 飯島郷―春近領（上伊那郡飯島町）
- 片切郷―春近領（上伊那郡飯島町・中川村）
- 田島郷―春近領（上伊那郡中川村田島）
- 名古屋―春近領（下伊那郡松川町大島名古屋）
- 藤沢郷―（上伊那郡高遠町藤沢）
- 黒河内郷―（上伊那郡長谷村黒河内）
- 甲斐沼郷―（伊那市富県貝沼）
- 福地郷―（伊那市富県福地）
- 中沢郷―中曾倉など八ヶ村（駒ヶ根市中沢）
- 上古田郷―（上伊那郡箕輪町上古田）

- 松島郷―（上伊那郡箕輪町松島）
  - 大萱郷―（伊那市大萱）
  - 御園郷―（伊那市御園）
  - 殿島郷―（伊那市東春近殿島）
  - 大井弓郷―（上伊那郡箕輪町大出）
  - 中越郷―（上伊那郡宮田村）
  - 宮田郷―（上伊那郡宮田村）
  - 上穂郷―（駒ヶ根市赤穂上穂）
  - 岩間郷―（上伊那郡飯島町岩間）
  - 横厩郷―（上伊那郡中川村横前）
  - 大島郷―（下伊那郡松川町元大島）
  - 鹿塩郷―（下伊那郡大鹿村鹿塩）
  - 大河原郷―（下伊那郡大鹿村大河原）
  - 飯田郷―（飯田市上飯田）
- 以上二六郷（『長野県史通史編』より）
- 当時の公領は大部分郷が基本で成り立っていました。これらの郷と現在の市町村の内における位置関係を比べてみますと、それぞれ大型のもの、小型のものが入り交じっていることがわかります。

平安末期頃から東山道付近を中心に、春近領といわれる公領が数多く点在していましたが、これは有力在庁が春近

という名義を使い、請負人となって設立した所領で、在庁名の一つであるといわれています。この春近領は、源頼朝に没収されて関東御領となり、年貢は春近年貢といわれ、公田に賦課されて将軍家政所に納入されました。

信濃春近領には近府春近五郷（塩尻市・松本市）、奥春近二郷（下高井郡・下水内郡・埴科郡・更埴市）、伊那春近六郷（上伊那郡・下伊那郡・伊那市・駒ヶ根市）がありました。そのうち伊那春近領は後になって北条氏の惣領家領（得宗領）となって、政所より池上弥次郎入道が派遣されてその管理に当たり、またそれぞれの各郷に地頭代が補任されていました。当時信濃国は馬の生産が盛んで、牧が数多く設けられていましたが、南信では伊那郡の北部から諏訪郡にかけて牧が集中しています。その内伊那郡内には次の五牧が設けられていました。

笠原牧―左馬寮領（伊那市美篁笠原）

平出牧―左馬寮領（上伊那郡辰野町平出）

宮所牧―左馬寮領（上伊那郡辰野町上島）

小野牧―左馬寮領（上伊那郡辰野町小野）

立野牧―左馬寮領（上伊那郡辰野町）

このうち治承四年（一一八〇）に平出牧と宮所牧が諏訪上社に、また同年立野牧と岡屋牧（岡谷市三角川流域）が諏

訪下社に寄進されています。

このように公領・牧が上伊那の北部地域に集中していたのに対し、荘園の大部分が下伊那に集中していることも一つの大きい特徴といえます。

\* 路原荘―（上伊那郡箕輪町北小河内を中心とする地域）この路原荘は始めは後院領路原牧であったのですが、後に荘園となって中宮篤子内親王領、関白藤原忠通領、近衛家領になりました。

\* 伊賀良荘―（下伊那郡飯田松川以南、阿知川以北の地域）この中には中村郷（飯田市中村）、河路郷（飯田市川路）殿岡郷（飯田市中殿岡・下殿岡）などの郷村が含まれていました。この伊賀良の荘は、延暦寺門跡妙香院領、尊勝寺領、八条院領、大覚寺統領となりましたが、後には江馬北条氏が相伝しています。松尾島田の鳩ヶ峰八幡宮、川路（飯田市）開善寺はこの江馬北条氏により造営創建されたものとされています。

\* 郡戸荘―（下伊那郡飯田松川以北の地域から飯田市・上郷町・飯田座光寺・高森町・松川町）ここは高陽院泰子領から近衛家領に伝領されました。

\* 伴野荘―（下伊那郡松川町生田・豊丘村・喬木村以南

秦阜村あたりまで)この伴野荘は竜東一帯の広い地域で、この中に中針田村(豊丘村河野中張)、宇久津村(不明)、福与(松川町生田福与)、□島(不明)里原(喬木村阿島里原)、阿島(喬木村阿島)、伴野(豊丘村伴野)などの各郷村があったことが知られています。知久郷(飯田市下久堅)には知久氏が神之峰城に本拠を構えていました。この伴野荘は始めは上西門院統子内親王領で、その後は後白川上皇領、後鳥羽上皇領と伝領されていきました。

\*江儀遠山荘(下伊那郡南信濃村など遠山川流域の地域)ここは鶴ヶ岡八幡宮供僧仲円領となり、その地頭には北条時政が補せられていました。

このように、荘園も公領と同じように郷村が基本単位となっています。それはこれらの荘園はもともと公領であったのが、中央の有力権門に寄進され荘園となったものからです、その内部構造は公領と同じだといわれています。また荘園内に百姓名(農民の名田)が見られず、その全部が領主名(領主の名田)であるのは、百姓名の編成が行なわれなかったからだとされています。

このように平安末期から鎌倉時代の伊那谷の各郷村は、公領・牧・荘園のいずれかに組み込まれていました。当時

の村名などは限られた文献史料でありますから、数多くは分かっておりません。しかし、さかんに開拓され、村が構成されて中世末の村へとつながっていったものでしょう。

### 3. 中世末期の郷村

中世も末期になってきますと前項の鎌倉期とは大分様子が変わってきます。また残されている史料も多くなつて、郷村名なども数多くわかってきました。先ず、浅川清栄氏の「信州諏訪上社御頭郷について(上)」(『信濃』)によれば、

上伊那―笠原郷・春日郷・宮所郷・平井弓郷・松島郷  
・中沢高見郷・中沢菅沼郷

下伊那―座光寺郷・知久本郷・知久柏原郷・虎岩郷の名前が挙がっています。当時これらの郷はどれくらいの大きさであったか不明ですが、例えば、下伊那の知久本郷は知久平を指しており、南原・知久平・柏原・虎岩の四ヶ村で知久郷または知久四郷と称されていました。近世の村に当たるものと考えてよいと思います。

また別資料の御頭役に下伊那の大島郷・阿(安)島郷・富田郷などが出ていますが、これも近世の村を郷と呼んでいるわけです。

下って、武田信玄は元龜元年（一五七〇）三月、下伊那郡大島台城を一大基地化するために、人足を大動員して造築工事を行っています。その時の文書を見ますと、

飯沼・山本・毛賀・南山・今田・南原・市田・牛牧・  
吉田・河野・田村・林・小河・阿島・富田・虎岩・伊  
久間・松尾・下条・知久衆・今田衆 以上

「以右郷中の人足云々」とあり、この時の郷もやはり近世の村を郷と呼んでいる事がわかります。

また元龜二年、武田消遙軒の下知状、永祿二年（一五六九）の川除普請についての信玄朱印の下知状（共に小川湯沢家文書）では、小河郷、牛牧郷となっていて、これも後の小川村・牛牧村を指しています。

ここに出てくる小河郷について少し掘り下げてみますと、下伊那郡喬木村には現在、阿島・加々須・大島・小川・氏乗・大和知・富田・伊久間の八区がありますが、『下久堅村誌』『喬木村誌』によりますと応仁（一四六七）から文明（一四六九）の頃は、阿島郷・小川郷・伊久間に分かれていて、現在の阿島・伊久間以外の領域は全部小川郷の内です。その後になって富田・加々須と分かれたとされています。しかし、前述の中世末には既に分かれてきていますの

で、本来の小川郷とはその性格は大きく違ってきていたものと考えられます。これなどから見ましても、当時は村も通称を郷と呼び、あまり郷と村の呼び方について厳密な區別をしていなかったのではないかと思います。

このように中世末期の伊那郡内において、郷村がどのように呼ばれていたか、断片的な資料からではその全体を見ることは出来ません。『南信伊那史料』中に記されている「幕政の石高庄郷領地の別」は、江戸時代初期のもので、中世末期の郷村の關係を知るには不適當のところもありますが、やはりある程度は推察できるのではないかと思います。

#### 中世末期伊那郡の庄郷村一覽

（古高は南信伊那史料による）

\* 蔭原庄 古高五、〇一六石三斗余

鎌倉時代の蔭原荘は、箕輪町の北小河内を中心とした地域ですが、ここでいう蔭原庄は当時の平出牧・宮所牧・小野牧・立野牧の所在していた処で、蔭原庄の位置が変わっていることがわかります。

小野郷 古高五、〇一六石三斗余

小野・雨沢（上伊那郡辰野町小野）

横川・上島（上伊那郡辰野町川島）

宮所・今村・宮木・辰野・新町・羽場・北大出

（上伊那郡辰野町伊那富）

平出・沢底・赤羽・樋口（上伊那郡辰野町朝日）

\*笠原庄 古高一四、九六三石八斗余

ここは以前の笠原牧および公領の中心部に当たる地域を占めています。

芦沢・笠原・青島・大島・川手（伊那市美篤）

日影・古町・狐島・上牧・野底・上新田・下新田

（伊那市伊那部）

西伊那部・御園・山寺（伊那市伊那）

鉾持（上伊那郡高遠町西高遠）

中沢郷（古来一三ヶ村）古高四、七二七石七斗余

菅沼・中山・曾倉・高見・吉瀬（駒ヶ根市中沢）

新山・福地・貝沼（伊那市富県）

大久保・火山・伊那・栗林・塩田（駒ヶ根市東伊那）

春近郷（春近組、古来八ヶ村）古高六、〇三七石八斗余

殿島・田原（伊那市東春近）

小出・下牧・表木・諏訪形（伊那市西春近）

中越・宮田（上伊那郡宮田村）

\*藤沢庄（古来七ヶ村）古高一、三四九石八斗余

古くは公領藤沢郷に当たります。

板町（上伊那郡高遠町東高遠）

弥勒・的場・野笹・板山・中村・中条・黒沢・四日市場

栗田（上伊那郡長藤）

台・北原・荒町・水上・御堂垣外・片倉

（上伊那郡高遠町藤沢）

\*入野谷庄（古来八ヶ村）古高二、七四七石三斗余

ここは古くから諏訪上下社領として奉仕してきたものと推察され、三峰川沿いに高遠町より奥へ遡った地域一体に当たります。

山田・小原・勝間・山室・荊口・芝平

（上伊那郡高遠町河南・三義）

非持・溝口・黒河内・市野瀬・浦

（上伊那郡長谷村美和・伊那里）

\*箕輪庄（古箕輪六郷）古高一、七六三石五斗余

古くは藤原荘の領域に当たり、箕輪六郷と称されていました。室町期になると藤沢行親は小笠原貞宗に属し、足利尊氏に党して功績があり、延元元年（一三三六）伊那郡箕輪六郷六千貫文に封ぜられたと伝えられています。また、箕輪福与城主藤沢頼親は、享祿・天文の頃（一五二八〜一五五五）箕輪六郷六千貫文を領したとされています。

これらから見ると、箕輪六郷は古くから諏訪系藤沢氏の支配下にあったことがわかります。

後世のことになりますが、『信陽城主得替記』には、「上伊那郡箕輪荘松島 伊那道中馬継ぎ駅場、古来箕輪領 甲州割千二百貫、古高一万三百二十六石三斗四升三合」とあり、天正一九年（一五九二）の天正検地では、箕輪領二六ヶ村の総高は、一一、三二六石三斗四升三合となっています。この箕輪領という呼び方はいつ頃から始まったのでしょうか。

これについては、天正一七年（一五八九）に真田昌幸の沼田領のことが問題となり、秀吉と北条氏直との間で沼田領を北条方へ分け与えることになりました。その代わりとして家康の支配地であった伊那郡箕輪の地が昌幸に与えられました。この時から箕輪領と称せられるようになったと一般的には考えられています。

木下・松島・中原新田・大出・沢・八乙女・下古田・上古田・富田（上伊那郡箕輪町中箕輪）  
福与・三日町・長岡・南小河内・北小河内

（上伊那郡箕輪町箕輪・東箕輪）  
中曽根・羽広・中条・上戸・与地・大萱・大泉新田

（伊那市西箕輪）

久保・殿村・田畑・神子柴・大泉（上伊那郡南箕輪村）  
福島（伊那市福島）

手良郷（三ヶ村または四ヶ村とあり）古高一、七〇八石余  
八ッ手・野口・中坪・下寺（下手良）（伊那市手良）

\*春近庄 古高七、二六二石八斗余

現在の駒ヶ根市赤穂より、南は上片桐までの竜西一帯の地域で、太田切川から片桐松川までの間、鎌倉時代は公領が数多く所在していました。

上穂・赤須（駒ヶ根市赤穂）

飯島・石曾根・田切・本郷（上伊那郡飯島町飯島）

片桐郷（七ヶ村）古高二、三一六石一斗余

七久保（上伊那郡飯島町七久保）

上片桐・片桐町（下伊那郡松川町上片桐）

田島・前沢・小平・葛島（上伊那郡中川村）

\*郊（郡）戸庄（二ヶ村）古高一四、二五二石一斗余

北は片桐松川より南は飯田松川までの竜西一帯の地域で、古くから郡戸荘と称されていました。末期には公領大島郷・飯田郷もこの中に組み込まれてしまいました。

飯田郷（三ヶ村）古高一、七七三石二斗余  
飯田郷（三ヶ村）古高一、七七三石二斗余

飯田町・上飯田（飯田市飯田・上飯田）

別府（下伊那郡上郷町別府）



飯沼郷(四ヶ村) 古高一、八二七石三斗余

飯沼・南条・下黒田・上黒田(下伊那郡上郷町)

座光寺郷 古高二、〇三〇石四斗余 (飯田市座光寺)

ここは古く、倭名抄に出てくる麻績郷の中心地とされています。『長野県町村誌』などでは、座光寺村は古来独立村なりとしています。『南信伊那史料』では、飯沼郷の中にに入れてあります。

市田郷(八ヶ村後一〇ヶ村) 古高五、四五一石六斗余

市田・市田原町・牛牧・吉田・大島山・出原

(下伊那郡高森町市田)

山吹・駒場・上平・竜ノ口(下伊那郡高森町山吹)

大島郷(三ヶ村) 古高二、一六九石五斗余

古町・新井・名古(下伊那郡松川町大島)

\*伊賀良庄 古高二五、五六六石三斗余

古くからの伊賀良荘の領域で、北は飯田松川より南は阿知川辺りまででしたが、後に南に延びていき、最終的には三河境までを含む領域となっています。

下郷(三三ヶ村) 古高一、八一八石八斗余

山村・名古熊・一色(飯田市鼎)

北方・大瀬木・三日市場・中村・上殿岡・下殿岡

(飯田市伊賀良)

島田・毛賀(飯田市松尾)

駄科・長野原・桐林・時又・上河路(飯田市竜丘)

下河路(飯田市川路)

久米・山本・竹佐(飯田市山本)

下瀬・伊豆木・立石(飯田市三穂)

清内路(下伊那郡清内路村)

駒場・中関・向関・昼神・小野川・大野

(下伊那郡阿智村会地・智里)

下条郷 古高三、六〇四石九斗余

(『長野県町村誌』には「古くは伊賀良庄下条郷または下条庄に属す」としてあります。)

小松原・粒良脇・阿知原・親田・大窪(大久保)・北又

・合原・入野・鎮西野・新井・仁王関・菅野・吉岡・山

田河内(下伊那郡下条村)

河内・栗矢野・大鹿倉・備中原(下伊那郡阿知村伍和)

波合(下伊那郡浪合村)

平谷(下伊那郡平谷村)

根羽・月瀬(下伊那郡根羽村)

(『長野県町村誌』には、「この二ヶ村は元は三河国足助郷、天文の頃下条庄に属す」とあります)

関郷 古高三、七七六石五斗余

(『長野県町村誌』には、「いずれも古くは伊賀良庄開郷に属す」としてあります。)

大島・恩沢・大平・雲雀沢・古城・粟野・鷺津・門原・浅野・鴨目・梅田・下楳田・荒木田(新木田)

(下伊那郡阿南町富草)

河田(元川田)・神子谷・中谷(中谷御供)・大森(大森平石)・大平(大平大那木)・深見・千木・小野・平久(平久大窪)・和知野・早稲田・井戸・田上(田上吉田)・小中尾

(下伊那郡阿南町大下条)

新野(下伊那郡阿南町旦開)

帯川・和合・日吉(下伊那郡阿南町和合)

売木(下伊那郡売木村)

福島・坂部・向方(下伊那郡天竜村神原)

長沼松島(下伊那郡天竜村平岡)

\*南山庄(南山郷) 古高四、九七一石五斗余

元は伴野荘の中ですが、知久氏の本拠神峰城の南方に広がる山あいの郷村として、中世末期頃からこのように称されるようになったとされています。

今田郷 古高二、〇二九石三斗余

今田(飯田市竜江)

次の二〇ヶ村を今田郷一括の内という。

萩坪・田力・芋平・野池・米川・法全寺・山中

(飯田市千代)

米峰・大郡(飯田市千代(千栄))

安戸・尾林・石林・宮沢・雲母・大屋敷・尾科

(飯田市竜江)

番田・怒田・打沢・高町(下伊那郡泰阜村)

鎌不取・稲伏戸・金野・唐笠・平野・黒見・田口・柿野

平島田・門島・万場・明島・左京(下伊那郡泰阜村)

田本・温田・大畑・漆平野・野宇・御佐野・我科

(この七ヶ村は、江戸初期に大南山村という連合村とな

りまた大南山郷ともいわれました) (下伊那郡泰阜村)

\*伴野庄 古高九、二四三石八斗余

ここは古くからの伴野荘の中心領域で、神峰城の北に広がっている地域です。

知久四郷(知久郷古高三、二四七石四斗余) 南原・虎岩

・知久平(知久本郷)(飯田市下久堅) 柏原(飯田市上

久堅)

小川・富田・加々須・伊久間・阿島(下伊那郡喬木村)

伴野・林・田村(下伊那郡豊丘村神稲)

河野(下伊那郡豊丘村河野)

福与(下伊那郡松川町生田)

\*鹿塩・大河原庄 古高一、九七四石五斗余

この鹿塩・大河原が古くから庄として成り立っていたかどうかは、不明な点が多く疑問が残ります。しかし、古くから香坂氏がここに蟠踞していて、南北朝時代には信濃宮宗良親王が本拠とされたことはよく知られるところです。

鹿塩・大河原（下伊那郡大鹿村）

大草郷 古高一、四三九石九斗余

大草・四徳（上伊那郡中川村）

日曾利（上伊那郡飯島町）

\*江儀遠山庄（六ヶ村） 古高一、〇八〇石三斗余

鎌倉時代からの遠山庄で、その領域は余り変わっていません。

和田・木沢・八重河内（下伊那郡南信濃村）

上村（下伊那郡上村）

満島・鷲巢（下伊那郡天竜村平岡）

中世末期の惣村内の様子について、『長野県史通史編』の「郷村の発達と土豪」に分かり易く書かれていますのでこれを要約すると、

「侍名字をもって領主に成り上がろうとする土豪・地侍と、下から成長してきた一般農民が、内部対立の芽を持ちながらまだ共同生活をしていた。」

土豪や地侍などは守護や国人などの被官人に組み込まれながらも、本格的な武士として離村は出来なかったし、農民と共同の信仰や共同の意識からは抜けられなかった。

南北朝から室町時代の戦闘で侍名字をもった地侍と雑人が活躍し、悪党といわれた集団が地侍と寄類（同心の雑人）とで構成されていたのも、それらが惣村内の土豪と農民の結合を基礎としていたためである。

戦国時代に入ると、土豪や地侍などは戦国大名から「郷中乙名敷者」おとなしきもの」と呼ばれ、代官衆として家臣団に組織されていた。農民は地下人として次第に彼らと区別され、統制が強化されていった。」

このような惣村内の様子は、伊那谷もやはり同じだったのです。それでは地下人と呼ばれる一般農民はどうだったのでしょうか。その地域の支配者が自由に使えるものは、中間・下人と呼ばれる隷属民でした。なぜ一般農民が中間や下人になってしまったのでしょうか。彼らは年貢や借財が払えず、その負債の代わりに身柄を拘束され、その身分に落されてしまったのです。

一般農民もこの頃になりますと負担が重くなり、いろいろ

ろと負債がのしかかるようになってきました。そしてその返済のために、領主や寺社より高利の銭を借り、そのため土地を売り渡すことが多くなり、その結果落ち込まざるを得なくなったのです。そこで、庄政（重い負担）に対し、農民は土地を捨てて「出百姓、逃散」ということになるわけで、農民が他の領主のところに逃げ込めば、それが原因となって領主間の対立を激しくさせていきました。当時京都などの大寺社でも、高利の金を貸して大きな蓄財をしていましたが、伊那谷の農民もまた同様な状況に置かれていました。

## 二、天正の検地と徳川氏による分割支配

### (一) 天正の検地

天正一八年（一五九〇）七月小田原攻めの後、秀吉の知行割により改めて毛利秀頼が伊那全部をあてがわれ、今度は秀吉の臣として羽柴侍従と称して飯田城を本拠としました。伊那郡は当時は四八、〇〇〇貫文余といわれていますが、天正事録の知行割によれば、毛利秀頼の知行は伊那全部七〇、〇〇〇石であったとされています。しかし、彼はほとんど在京していて、飯田城代の篠治秀政、高遠城代の勝齋（姓不明）の二人に治めさせていました。

天正一九年（一五九一）よりの検地の結果は、総高一〇〇、六三三石一斗五升八合八勺で、上伊那分は約一〇〇ヶ村余で四六、〇〇〇石、下伊那分は一四九ヶ村で五四、〇〇〇石、村数は合計約二五二ヶ村（記載筆数）でした。

毛利秀頼はこの検地で三〇、〇〇〇石余を打ち出して、一躍一〇〇、〇〇〇石の大守となったわけです。

それでは秀吉はどのような方法で全国統一の検地を行ったのでしょうか。これについては既に数多くの資料に示されていますが、分かり易くまとめると次のようになります。

- (1) 従来まちまちであった間竿を六尺三寸に一定した。
- (2) 三〇〇歩（坪）を一反として、町・反・畝・歩の制に改めた。
- (3) 土地の品等を上・中・下・下々の四等級にすること  
を原則とした。
- (4) 一反歩の標準生産量を表示する斗代（石盛とも言う）  
を定めた。

このような統一した方法により、全国画一的な土地制度を打ち立てたところに、天正検地の特徴があるわけですが、特に重要なことは、今までの貫高制を廃止して石高制

表-1 天正検地伊那郡集計一覧表

村 高	上伊那郡分	下伊那郡分
2000石 以上	0	3 (2.0%)
1500~1999 石	1 (0.9%)	3 (2.0%)
1000~1499 石	6 (5.7%)	10 (6.7%)
500~ 999 石	27 (25.7%)	21 (14.1%)
100~ 499 石	65 (62.0%)	62 (41.6%)
50~ 99 石	4 (3.8%)	33 (22.2%)
49石 以下	2 (1.9%)	17 (11.4%)
無 高	0	0
村 数 計	105 (100%)	149 (100%)

(長野県史・信濃史料・上伊那誌により集計) 松沢

に改めた「太閤の石直し」です。これは土地の生産高を基礎とした、当時としては画期的なものであったのです。その上、以前はまことに漠然としていた郷は、いわゆる「村切り」をされ、全部村単位とするように決められました。この検地により打ち出された伊那郡の総石高が、一〇万石余であったのです。それではこの時の上下伊那の様子を表により比較してみることになります(表-1)。

これで見ますと、上伊那郡には二、〇〇〇石以上の村はなく、一、五〇〇石以上は一ヶ村、一、〇〇〇石以上でも七ヶ村にすぎず、大部分は一〇〇石以上一、〇〇〇石未満で、村数は九二ヶ村(八七・七%)となっています。五〇石以下の極小型村は全部で六ヶ村(五・七%)で、全体的に見て大型村の数も多くなく、また極小型村も少ないのが特徴といえます。

それに比べ下伊那郡は、上伊那より石高が八、〇〇〇石多いこともあってか、村数が四〇ヶ村余も多くなっています。その内容を見ますと、二、〇〇〇石以上が三ヶ村、一、五〇〇石以上が同じく三ヶ村、一、〇〇〇石以上は一六ヶ村となり、上伊那の約二倍になっています。一〇〇石以上一、〇〇〇石未満の村数は八三と少なくなっていますが、一〇〇石以下の極小型村は五〇ヶ村(三三・六%)と断然多くなり、これが下伊那の大きな特徴といえることができます。それでは村別にその内容を見ることにします。

\*上伊那郡村高(単位石以下省略)

- 一、五〇〇石以上 赤須(一五八七)の一ヶ村
- 一、〇〇〇石以上 小井手(一四二二)宮田(一〇八二)殿島・狐島(一四四二)小河内(二〇三二)松島(一四七〇)上穂

(一〇七九)の六ヶ村

五〇〇石以上

宮木(六一二) 樋之口(五八七) 辰野

(五三七) 平出(六七五) 北大出・羽

場(七八〇) 新町(六一〇) 笠原(五

四七) 大島(六三九) 西伊奈部(九七

九) 三蘭(六八八) うの木(六七五)

山田(五九五) 福地(七六五) 曾藏

(六三四) 高見(七〇〇) 下寺(八一

三) 福島(五三五) 三日町(七二二)

長岡(八八七) 大井手(五七二) 木下

(七三五) 殿村(七〇四) 上方切(六

四九) 上飯島(六八九) 石曾根(五四

三) 田切(九四〇) 宮島郷大草の事

(六三六)の以上二七ヶ村

一〇〇石以上  
六五ヶ村、村名省略。一〇〇石から五

〇〇石まですべてを含む。上伊那では

このクラスが最も数が多い。

一〇〇石以下  
野そこ(九〇) 中山・竹ノ沢(六四)

与地(六八) 上戸(八八) 以上四ヶ村

(ただしこの中には村が小型のため二

ヶ村をまとめたの記載あり)

五〇石以下 小横川(二四) 沢尻(四〇)の二ヶ村

村名を省略した一〇〇石以上の六五ヶ村のうち、二ヶ村  
以上を併せて記載しているものが次のようにあります。

「新井・坂井」「広面・狐島」「南田島・古城」「大

川原・鹿塩」「新井・中村・つるべ」「ひっそり・い

いぬま・やた」。

これらはそれぞれ平均に分割してみるとやっと一ヶ村当り  
一〇〇石に達する村高となります。また、村名の記載がな  
く、「三一七石、三三一石」と村高のみのものが二つ見受  
けられます。

\*下伊那郡村高(単位石以下省略)

二、〇〇〇石 座光寺(二〇五二) 島田(二〇三二)

以上今田(二〇〇〇) 以上三ヶ村

一、五〇〇石 市田本郷(一七一九) 飯沼南条(一七

以上〇九) 上飯田(一八二七) 以上三

ヶ村

一、〇〇〇石 新井(二〇九三) 吉田(二〇七七) 別

以上府(二〇八五) 山村(二三三三)

伊豆木(二三三〇) 小川(二〇一三)

柏原(二二二七) 虎岩(二一六二) 伴

野(二〇六六) 遠山六ヶ村(二〇八〇)

以上一〇ヶ村

五〇〇石以上

- 上芹桐(六四九) 大島本郷(六八〇)
- 牛牧(六三〇) 下黒田(七八八) 毛賀(五二〇) 駄科(六〇九) 桐林(六二〇)
- 下川路(七〇二) 立石(五二七)
- 久米(五一七) 中村(九六四) 竹佐(六〇〇) 山本(九二〇) 中関(五七一)
- 新野(六三四) 富田(六八七) 知久平(五七二) 阿島(九六三) 田村(九四三) 河野(九八五) 打沢他一ヶ村(八六八) 以上二一ヶ村

一〇〇石以上

- 六二ヶ村(村名省略) 一〇〇石から五〇〇石までの村すべてを含み、下伊那の中ではもっとも数が多い。

一〇〇石以下

- 光明寺(九一) 昼神(五九) 小野河(九五) 河内(七六) 鎮西野(七二)
- 仁王関(六〇) 古城(五九) 浅野(七一)
- 船窪(五三) 三田新木野(八九)
- 大久保(六四) 大平大那木(八一) 大森平石(八二) 神子野谷(五一) 和知野(七七) 上田小野(六七) 早稲田古

五〇石以下

- 市場(七三) 小中尾(六一) 井戸(六八) 向方帯川(七〇) 日吉和合(六九)
- 浪合(五二) 平谷(七二) 売木(五八)
- 福島(五二) 長沼(五二) 芋野平(六四) 野池(六四) 法専寺(八六) 石林(六二) 左京(九九) 美佐野(八一)
- 温田(八八) 我治名(五六) 以上三四ヶ村、ただし二ヶ村をまとめて記入されたものが七ヶ村あります。

- 大鹿倉(七) 鷺津(三八) 千木(四〇) 月瀬(四一) 坂部(四五) 雲母(四〇) 尾科(四〇) 大屋敷(三七) 休戸(二七) 田本(四七) 市場(四一) 茶原(二四) 新井(二〇) 小松倉(二三)
- 大畑(三一) 大久那(二〇) 漆平野(二三) 以上一七ヶ村

最後の一七ヶ村などは下伊那分でもっとも小型の村ですが、それでも検地帳には独立村として記入されています。一〇〇石以上に分類され、村名を省略した村のうち二ヶ村合併で記載されているものは、「親田・相田」「芋ノ窪・新井」「菅野・吉岡」「鴨目・へくり」「田上・吉田」

「金野・番田」などで、「けろくぼ・松のくぼ・八郎倉」は三ヶ村が併され、また「上大こほり・下大こほり・柿かくほ・てんのくぼ・百田」の合併記載は次の検地から大郡村としてまとめられています。

打沢他として五〇〇石以上のところに入れられていた村々は、「打沢・からかさ・かど島・いなふし堂・ぬく田黒見・悪島・平野・高町・平島田・野田・のたわ」の二一ヶ村で、これらは皆小型村の中に加えられるべきものです。

このように見ますと、当時の下伊那における村数は検地記載筆数に約三〇ヶ村を加えた、約一七〇ヶ村余になるわけで、いかに小さな村々が多かったかがわかります。

## (二) 徳川氏による分割支配

毛利秀頼は、朝鮮の役へ約一、〇〇〇人の兵をひきいて参陣しましたが、病を得て文禄二年（一五九三）に死去しました。その遺領は彼の女婿である京極高知に与えられ、羽柴伊那侍従と呼ばれました。しかし彼の検地はきびしく、また年貢の取り立ても過酷であったようで、そのため「京極様は鬼でござる」といわれ、非常に恐れられていました。慶長六年（一六〇一）、前年の関ヶ原の合戦の功により、丹後宮津一三〇、〇〇〇石に出世して移って行きました。

この毛利・京極の二人をもって一大名による伊那全郡支配は終り、幕末まで小さく分割された分断支配になるのです。このことは次の慶長六年の知行割を見るとよくわかります。

\*慶長六年伊那郡知行割

上伊那分（四六、〇〇〇石）

保科氏（高遠） 二五、二〇〇石

小笠原氏（飯田） 飛び地領一六、四〇〇石

幕府領 残り全部

下伊那分（五四、〇〇〇石）

小笠原氏（飯田） 三三、六〇〇石

小笠原氏（伊豆木） 一、〇〇〇石

知久氏（阿島） 三、〇〇〇石

宮崎氏（駒場上町） 二三五石

市岡氏（上中関） 三三七石

遠山氏（遠山和田） 一、〇八〇石

座光寺氏（山吹） 一、四〇〇石

宮崎氏（向関） 三二五石

宮崎氏（駒場下町） 三〇一石

幕府領 残り全部

幕府はなぜこのような分断政策を取ったのでしょうか。



それは、伊那谷は東は南アルプス、西は中央アルプスに挟まれ、そのうえ南北は共に閉鎖されていて、峠越えをしないう限り外部に通ずることはできない要害堅固な地形となっています。しかもいざとなれば逃げ込む場所はいくらでもあり、ゲリラ戦による抵抗も可能です。そしてそこに住む領民はきびしい気候風土の中で育った強靱さを持っています。このような伊那谷を一大名に支配させることは、幕府の統制上問題があったからだといわれています。私はそれに加えて、材木など豊富な山林資源を幕府が押えるためであったと思います。それは、豊富な材木の産出地はことごとく家康の蔵入地とし、徳川幕府成立後は幕府領にしていることでもわかります。幕末時の様子を参考のために見ると次の通りです。

\*明治元年（一八六八）伊那郡所領の状況

上伊那分（四六、〇〇〇石）	
内藤氏（高遠）	二八、五〇〇石
近藤氏（山本）	一、八三〇石
太田氏（松島）	五、〇〇〇石
阿部氏（白河）	小部分
幕府領	残り全部

下伊那分（五四、〇〇〇石）

堀氏（飯田）	一五、〇〇〇石
松平氏（高須）	一五、〇〇〇石
阿部氏（白河）	一三、八七四石
小笠原氏（伊豆木）	一、〇〇〇石
座光寺氏（山吹）	一、四〇〇石
知久氏（阿島）	三、〇〇〇石
近藤氏（山本）	三、一七〇石
幕府領	残り全部

### 三、伊那谷の村々

#### (一) 大型村と小型村の区分

今までに伊那谷の地形の特徴、その中における中世の少数民族の群立、天正の検地の様子などから、伊那谷、特に下伊那は小型の村々の寄り集まりであったことを申し上げてきました。表12「正保二年四月伊那郡御料・私領支配別村高集計表」は、伊那郡中高遠領は除かれているため、伊那一〇〇、〇〇〇石余の中の五〇〇〇石余の分ですが、正保当初（一六四五）の様子を知ることができます。これによりまずと、一〇〇石より四九九石までが九四ヶ村で最も多く、次が一〇〇石以下の最小型村の五九ヶ村、三番目が五〇〇石より九九九石までの三二ヶ村の順になっているこ

表－2 正保二年四月伊那郡御料私領支配別村高集計表

単位々村

支配高 村高	代官所千村平右 衛門分 4093石 6斗6升6合	代官所知久内蔵 助分 1039石8 斗4升7合3勺	代官所宮崎三左 衛門分 823石 2升5合	代官所宮崎半左 衛門、市岡瀬兵 衛分 488石9斗 5升2合	代官所宮崎半左 衛門分 108石 3斗6升5合	脇坂淡路守分 49,976石4升 8合6勺
2,000石以上						3
1,500～1,999石						3
1,000～1,499						10
500～999	2		1			20
100～499	9	2	1	2	5	46
100石以下		15	2		1	15
無高	1					1
村数	12ヶ村	17ヶ村	4ヶ村	2ヶ村	6ヶ村	98ヶ村

支配高 村高	近藤織部知行所 5000石	井上頼母知行所 5000石	知久内蔵助知行 所 3000石	座光寺善兵衛知 行所 1425石	小笠原朝負知行 所 1000石	宮崎備前知行所 595石9斗9升 1合
2,000石以上		1				
1,500～1,999石						
1,000～1,499					1	
500～999	4	1	3			
100～499	8	10	1	4		2
100石以下	6	19	1			
無高						
村数	18ヶ村	31ヶ村	5ヶ村	4ヶ村	1ヶ村	2ヶ村

支配高 村高	宮崎三左衛門知 行所 301石	宮崎半左衛門知 行所 325石	市岡瀬兵衛知行 所 337石	宮崎太郎左衛門 知行所 235石	計	総高 7万4721石 7斗5升4合9勺 御蔵入り分 7525石8斗5升 5合3勺 内給人知行分 6万7195石8斗 9升9合6勺 寺社領分 528石3斗2升 総高に寺社領分を 加え 7万5250石7升 4合9勺
2,000石以上					4	
1,500～1,999石					3	
1,000～1,499					11	
500～999					32	
100～499	1	1	1	1	94	
100石以下					59	
無高					2	
村数	1ヶ村	1ヶ村	1ヶ村	1ヶ村	205ヶ村	

(長野県史近世史料編：名子将臣氏所蔵文書より作成) 松沢

とがわかります。

江戸時代の村は、現在のように川に立派な橋があるわけではなく、峠越えの道も険しく、交通手段は専ら我が足に頼るわけですから、どうしても地形的なまとまりを必要とします。したがって開かれた地域であれば大型村になり、小さなまとまりの地形のところは小型村とならざるを得ないわけですね。当時の村の大小は、その村高で判断することが妥当で、一応この大小により区別して考えてみることにします。

表-3 「上下伊那郡村石高の変遷一覧」より見て標準村を先ずどのあたりにおくかですが、他国のことはさておいて、伊那谷では一ランク下げて、一〇〇石以上九九九石以下を考えてみました。したがって、一、〇〇〇石以上が大型村、九九石以下を小型村としました。この表によれば、大型村の数は平均して下伊那では一一・二%、上伊那では一一・三%となっていて、構成比ではおよそ下伊那と同じになっていますが、小型村は無高村を除いて上伊那では平均一五・四%であるのに対し、下伊那では二九・三%で断然小型村の多いことが分かります。

表-3 上下伊那郡郷村石高の変遷一覧

村 高	上伊那郡			下伊那郡			
	正保4年	元禄15年	天保5年	天正19年	正保2年	元禄15年	天保5年
2000石 以上	1	2	2	3	4	3	3
1500-1999 石	2	4	5	3	2	3	3
1000-1499 石	5	9	9	10	10	13	16
500~ 999 石	24	29	32	21	21	19	25
100~ 499 石	63	56	54	62	69	89	78
50~ 99 石	9	18	14	33	34	34	28
49石 以下	4	5	4	17	20	13	12
無 高	1	0	0	0	2	2	0
村 数	109	123	120	149	162	176	165

『長野県史近世資料編』より集計（松沢）

(ロ) 江戸時代中期における大名領の様子

伊那郡は江戸時代中期に入ってまもなく、大名の転封・改易・新規の取り立てが行なわれました。

飯田藩主脇坂氏は寛文二年(一六七二)播州竜野に転封となり、その後へ野州烏山から堀親昌が入りました。堀氏は脇坂氏とは異なり小禄でありましたので、上伊那領一六、〇〇〇石はもちろん受継がず、下伊那領のうち二七ヶ村二〇、〇〇〇石ということでした。その後天保年間の一時期、二七、〇〇〇石に増されましたが、弘化二年(一八四五)には一七、〇〇〇石に削られ、幕末の元治元年(一八六四)には、とうとう一五、〇〇〇石になってしまいました。

美濃国高須藩主松平義行は、尾張徳川家二代藩主大納言光友の次男として生れ、その母は三代将軍家光の長女千代姫でした。天和元年(一六八一)三〇、〇〇〇石の大名に取り立てられ、信州の幕府領の中から高井・水内で一五、〇〇〇石、下伊那で一五、〇〇〇石を賜り、下伊那領については竹佐村(飯田市山本竹佐)に代官所を構え、これを治めさせました。高井・水内の分は後年元禄に入り、美濃高須(岐阜県海津郡海津町高須)に所換えになり、ここに

本拠を構えたことにより高須藩と呼ばれ、幕末まで変わることはありませんでした。

高遠藩については、保科氏の後を受けて鳥居氏が寛永一三年(一六三六)に入りましたが、元禄二年(一六八九)改易となり、一時期幕府領となっていました。その後元禄四年、内藤氏が伊那領二八、五〇〇石(八二ヶ村)、筑摩領他四、五〇〇石(一一ヶ村)計三三、〇〇〇石で入封しました。しかし、幕府領となっていた時の検地(元禄検地)が非常にきびしく、余裕がなかったことから、幕末まで財政的に困難を極めたことは有名でした。

このように伊那郡内の三大名は、その成立・経過にはそれぞれに差異がありますが、その領内の村々の様子を別表表1-4「江戸時代中期伊那郡大名領村高分類一覧」により比較してみると凡そ次の通りとなります。

\* 飯田藩

飯田藩には一、〇〇〇石以上の大型村は島田村を筆頭に八ヶ村ありますが、大部分は一〇〇石以上、一、〇〇〇石未満の標準村で、一〇〇石以下の極小村は一ヶ村もなく、大部分の村が天竜川沿岸に所在していました。小型大名ながらその領地はまとまりが良く、その点恵まれていたということができません。しかし、前述のように時代が下がるに

表-4 江戸時代中期伊那郡大名領村高一覧

村 高	飯 田 藩 寛文12年(1672)	高 須 藩 天和元年(1681)	高 遠 藩 元禄11年(1698)
2000石 以上	1 (4%)	0 (%)	0 (%)
1500~1999 石	3 (11%)	0	1 (1.2%)
1000~1499 石	4 (15%)	2 (4.3%)	4 (4.9%)
500~ 999 石	6 (22%)	8 (17.4%)	13 (15.8%)
100~ 499 石	13 (48%)	28 (60.9%)	44 (53.7%)
100石 以下	0	8 (17.4%)	20 (24.4%)
村 数 計	27 (100%)	46 (100%)	82 (100%)

この表は飯田藩堀氏2万石、高須藩松平氏伊那領分1万5000石分、高遠藩内藤氏伊那領分2万8500石の就封時の比較である(長野県史近世史料編による)。

したがいに減封され、この藩も財政的には非常に苦勞をしています。

〔飯田藩領内の村々〕

二、〇〇〇石以上 島田

一、五〇〇石以上 吉田・市田・上飯田の三ヶ村

一、〇〇〇石以上 座光寺・飯沼・別府・山村の四ヶ村

五〇〇石以上 牛牧・下黒田・大瀬木・毛賀・駄科・

桐林、の六ヶ村

一〇〇石以上 出原・大島山・上黒田・南条・名古屋

熊・一色・北方・上殿岡・下殿岡・

時又・上川路・三日市場・中村之内

の一三ヶ村

以上合計二〇、〇〇〇石、二七ヶ村

\*高須藩

高須藩は、幕府領を割いて新たに作り立てられた大名です。すから、伊那領はどうしても小さな村々が多くなります。

飯田藩が二〇、〇〇〇石で二七ヶ村であるのに対し、一五、〇〇〇石で四六ヶ村というところを見ると、このことがよく分かります。一、〇〇〇石以上の村は竹佐・虎岩の二ヶ

村のみで、一〇〇石以下の極小村が八ヶ村もあります。その上、領内の村々は飯田藩のようにまとまっておらず、しかも天竜川に面した上新井・古町・伴野・伊久間・虎岩・知久平・下川路の七ヶ村は、下伊那でも屈指の水災の村として知られていました。そのため、藩の成立以来廢藩まで、一貫して宗家である尾張藩は毎年多額の合力米・合力金を支出して、支藩の財政を支えていました。そのような中でもこの藩の年貢高は他の藩に比べると割合に低く、民治に心を配っていたということができません。その結果でしょうか、一回も紛争が起きていないことは、誠に珍しいことといわなければなりません。

〔高須藩伊那領内の村々〕

- 一、〇〇〇石以上 竹佐・虎岩の二ヶ村
- 五〇〇石以上 上新井・伴野・伊久間・柏原・下川路
- 久米・中村・新野の八ヶ村
- 一〇〇石以上 古町・福島・壬生沢・知久平・柿ノ沢・山本・伊豆木親田・入野・雲雀沢・門原・田上・早稲田・和知野・平久大窪・小野・深見大那木・大森平石・中谷御供・神子谷川田・新木田・粟野・下新井・山田河内・阿知原・下瀬の二八ヶ

村

- 一〇〇石以下 柏原山分・鎮西野・古城・鷲巢・小中尾・井戸・千木・浅野の八ヶ村
- 以上合計一五、四二二石六斗九合、四六ヶ村

\*高遠藩

高遠藩は三三、〇〇〇石のうち、伊那領は二八、五〇〇石八二ヶ村、その数多い村の中で一、〇〇〇石以上は殿島村を筆頭に五ヶ村のみとなっています。もちろん大部分は一〇〇石以上千石未満の村々ですが、一〇〇石以下の極小型村を二〇ヶ村も抱えています。これは上伊那では高遠領のみで、ほかには存在していません。また、高遠領の村々が飯田や高須領の村々と大きく異なる点は、枝村が誠にも多いということですが、しかも親村の村高が一〇〇石以下でありながら、その中に枝村を二つも抱えている村や、五〇〇石台の標準の大きさの親村が、枝村を五ヶ村含んでいるという極端な例まであります。下伊那にも枝村はありますが、高遠領ほど多くはありません。

ここで言う高遠領八二ヶ村とは、親村数と親村の高外新田村(三ヶ村)を加えた合計数を言っており、更に枝の七四ヶ村を加えますと、一村あたりの村高はますます小

さくなり、村数は大幅に増えて一五三ヶ村になり、それにもなりませぬ。例えば、幕末高遠領内を中心に井筋の開削に努力した伊東伝兵衛は、杉島村の庄屋でしたが、この当時杉島村は市野瀬村の枝村で、八二ヶ村の中には名を連ねてはいませぬ。高遠藩は元禄の検地がきびしかったばかりではなく、地形的にも、また当時の生産性の上からも生活がきびしかったのでしよう。

〔高遠藩伊那領内の村々〕（ ）内は枝村名

一五〇〇石以上 殿島村（原新田）のみ

一〇〇〇石以上 西伊奈部（小室・大坊・小沢・平沢・日向・芝原・横山・内野かや）

日向・芝原・横山・内野かや）

福地（竹松）小出（島・白沢・小屋

舗・柳沢）宮田（太田切・丸山・上

宮・田原・殿島・原新田）の四ヶ村

五〇〇石以上 山田（夏焼新田・下新田）非持（南非

持・非持山）笠原（一日市場・辻）

大島・東伊奈部・貝沼（桜井・北林）

・高見（徳光寺・佐越・神宮・落合）

挽野田）樋口（山際・下田・万五郎・

川子沢）・平出（上平出・上野新田）

一〇〇石以上

・辰野（唐木沢）宮木・北大出・羽場の一三ヶ村

板町（鍛冶）弥勒（栗羽場）中村

（塩久）中条・栗田（殿垣外）御堂

垣外・片倉・小原（池田・川原・大

沢）勝間・溝口・黒河内・市野瀬

（杉島・中尾）山室（半対・宮沢）

鉾持・芦沢・川手・狐島・上牧・野

底・御園・山寺（御前瀬）新山（奈

良尾・上条・今泉）火山（板取）塩

田（箱畳）大久保（門前）栗林・伊

奈（甚八島）本曾倉（大津渡・原）

中曾倉・大曾倉・菅沼（永見山）吉

瀬・表木（赤木・下小出・鍛冶島）

下牧・田原・中越（下河原・西大久

保・小田切・太田切）諏訪形・赤羽

（川子沢）沢底（水なし・鴻野田）

横川・上島（渡戸）今村・宮所（小

横川）新町（神戸）の四ヶ村

的場・板山（中平）野笹・黒沢・四

日市場・台・北原・荒町・水上（土

一〇〇石以下

表-5 高速藩伊那領村高分類表

村 高	村 数	%	備 考
2000石 以上	0	0.0	
1500~1999 石	1	0.6	殿 島
1000~1499 石	1	0.6	宮 田
500~ 999 石	13	8.4	
100~ 499 石	66	42.3	
100石 以下	75	48.1	
村 数 計	156	100.0	

註：10石以下16ヶ村（元禄11年）

『長野県史より』

橋・伊屋島）松倉新田（御堂垣外の高外村）浦・荊口・か  
ぎ掛（荊口の高外村）芝平・ずみの木（芝平の高外村）青  
島・上新田・下新田・中山・雨沢の二〇ヶ村（高外村三ヶ  
村を含む）

以上、合計二八、五二六石七斗二升二合

村数一五三ヶ村（内七四ヶ村は枝村）高外新田村三ヶ村、  
合計一五六ヶ村

高速藩伊那領の親村を中心に見てきましたが、この時の  
『領地郷村帖』では枝村まで全部を上げて、総村数一五六  
ヶ村としていますので、表-5「高速藩伊那領村高分類表」  
は、これにより作成しました。

この一覧によって見ますと、一、五〇〇石以上の殿島村  
一ヶ村のみは前表と変わりませんが、一、〇〇〇石以上と  
いうことになりますと、枝村分を差し引きますので残るの  
は宮田村一ヶ村のみとなり、他の西伊奈部・福地・小出の  
三ヶ村は一段下のランクになってしまいます。五〇〇石以  
上については、村の内容（村名）は一部変わりますが、村  
数では一応前と同じになっています。それが、一〇〇石以  
上となりますと六六ヶ村、一〇〇石以下では七五ヶ村にも  
なり、その合計は一四一ヶ村、九〇・四％にも達します。



そして一〇〇石以下の極小型村が極端に増加していることが分かります。しかも、その中に一〇石以下が一六ヶ村もあり、その割合は全体の一〇・三％に当たります。

これを見ると高遠領の実際の内情は、天竜川・三峰川などの沿岸部と、台地上の数少ない大型村を除けば、誠に小さい村々が寄り集まっていたことがよく分かります。

## ㊦ 大型村

### 1. 大型村の位置

それでは大型村といわれる村々は、どのような地形的条件を持った場所に位置しているのでしょうか。

これらの村々は、天竜川の沿岸部の広い氾濫原か、または支流によって形成された広い扇状台地上に位置しています。上伊那の例を見ますと、殿島は天竜川と三峰川の合流部にできた広大な氾濫原上の村で、上穂・赤須・宮田などは扇状地の台地上に位置している村です。また、松島・木下・片桐などは、広い台地上と広い天竜川の氾濫原の双方にまたがっている村々です。そしてこれらの村々は明治以降も農業条件に恵まれ、生産高も多く余裕のある村といわれてきました。下伊那の場合も上伊那と同様ですが、村別に様子を見ますと、

\*天竜川の氾濫原に面している村々

新井・別府・伴野・飯沼南条・下川路・下市田・座光寺  
・島田

\*広い台地上の村々

柏原・虎岩・中村・竹佐・山本・市田本郷・上飯田

\*台地上と天竜川氾濫原の双方に位置している村々

吉田・今田・片桐

その他の村々は天竜川の支流に面していたり、大型の盆地に位置しています。またこれらの大型村は上伊那の場合と同じように、農業の立地条件は他の村に比べ整っていて、下伊那中でもその富裕度は上位にランクされていました。それではその大型村の中から代表的なものとして片桐村と島田村についてお話しして見たいと思います。

### 2. 片桐村

当時の片桐村（現在の下伊那郡松川町と上伊那郡中川村の一部）は、上伊那の南端で、南は片桐松川によって下伊那の旧大島村に接していました。

天正一九年（一五九一）の検地帖では、片切領（上片切以下六筆一ヶ村）計一、五五四石八斗一升七合三勺となっています。その中で、上片切（飯田領）六四九石九斗三升

七合三勺、新井・中村・つるへ（飯田領）四八四石八斗五

升八合三勺としてあり、正保二年（一六四五）には片桐村（飯田領）二、七九六石九斗八升七合九勺と記されています。また元禄一五年（一七〇二）一二月では、片桐村（幕府領）四、三三八石八升九合となっていて、天保五年（一八三四）一二月には、片桐村（幕府領）五、〇七四石九斗となっていて、上下伊那郡中最も村高の大きな村となっています。しかし、その内容を詳しく見ますと、天竜川沿岸部の前沢村などはこの時の記録には出ていけませんので、周辺の小型の村々を含めての村高と考えられます。そうなりますと、この片桐村の範囲は、一、〇〇〇石余といわれた天竜川沿岸部の水田地帯から河岸段丘を上り、その段丘の上から西の山麓まで広がる、東面した緩やかな台地の上の地域全部とそれに葛島を加えた地、すなわち旧片切領をいうことになるでしょう。

この土地は古くから開け、南信濃源氏伊那真人為公流の片切氏がここに蟠踞しており、天竜川に面して突き出した台上に当時築造された船山城跡が残されています。またこゝは保元・平治の乱に源義朝に属して活躍した、片切小八郎大夫景重の本貫の地でもありました。台地上は畑地も多いが、山麓からの沢水を利用した水田も開けていて、生産

力も相当にあったようです。

尾張徳川家二代藩主大納言光友の次男、松平撰津守義行が天和元年（一六八一）三〇、〇〇〇石の大名に取り立てられた時、高井・水内で一五、〇〇〇石、下伊那で一五、〇〇〇石を与えられました。しかし、高井は現在の湯田中・夜間瀬など中野市の山際寄りの地域であったため、新しく三〇、〇〇〇石に相当する屋敷の建設と、それに伴う町造りもままならないとして「片切辺に所替えをして欲しい」（『高藩紀事』）と強い願いを出しています。結局は美濃高須（一五、〇〇〇石分）へ所替えになりましたが、これを見ても、この地はやはり伊那幕府領の中でも上位にランクされた村であった、という事がわかります。

しかし、この村の天竜川沿岸部は、度重なる水害に悩まされ、その川除のために大きな犠牲と努力を払っています。その中で主なものを拾ってみますと、寛永元年（一六二四）四月の大洪水で田島は農地の大部分を失い、農民はそのため一旦ここを離れ、台上の七久保村に移住しました。その後村に戻り、荒れ果てた氾濫原を開いて一村を作りましたが、正徳五年（一七一五）の未満水で元の荒れ野に戻ってしまい、またこの地を去り七久保村に移住した者が多かったといえます。この村は、江戸時代には度重なる

水害に襲われ、一度大きな被害を受けるとなれば、このように村の大半が壊滅してしまうような状況に置かれる土地であったのです。

このような地に独力で川除堤防を築き、旧地を守る努力を重ねたのが、前沢村の地主松村理兵衛で、三代にわたるその献身的な行為は、理兵衛堤防の名を現在に残しています。理兵衛堤防は、寛延三年（一七五〇）築堤の願いを幕府に提出し、その許可を得て直ちに工事にかかりました。その後度々洪水との闘いをくりかえし、以来三代、約一〇〇年かかって文化年間になり竣工したといわれています。松村理兵衛のこの川除工事の宝暦以来の様子を見ると、工事人足は五八二、一四〇人、この賃金は二八、六〇〇両にのぼり、この後も莫大な人足費用を要しています。これを見ても、松村理兵衛がこの築堤に注いだ努力を知ることができます。

この幕府領片桐村（田島・前沢・上片桐・片桐・七久保・小平・葛島）も、明治八年には、葛島は天竜川東にあるため大草に合併しました。以後幾度の変遷を経て、現在は七久保村は飯島町へ、上片桐は下伊那郡松川町に合併し、それ以外は川東の南向村と合併して中川村となり、それぞれ別れ別れの道を歩んでいます。台地上は飯田線上片桐駅を

中心にして県立高校もあり、工場も進出していますが、その他の地域は隣の旧大島村（現松川町）と共に一大果樹地帯を形成しています。

### 3. 島田村

片桐村は、台地上と天竜川沿岸部の双方にまたがった村でしたが、島田村はこれとは対照的なのでその様子を見ることにします。（写真1-1）

島田村は旧松尾村（現在の飯田市松尾）の中心地域に当たります。明治七年に島田村と毛賀村が合併して松尾村に なったわけですが、天保五年（一八三四）の村高で比較してみると、島田村が二、四三二石、毛賀村が六四五石ですから、松尾における島田の位置が大きかったことが分かります。この松尾地域は、北は飯田松川、南は毛賀沢川により区切られ、西は八幡原によりその台上で鼎町（現飯田市）に接しています。台地上から東を望みますと、以前は眼下に広々とした水田が天竜川まで続き、その東端は天竜川沿岸部でも稀な大型氾濫原になっています。この地は古くから開かれた処で、下伊那の平坦部には六世紀頃の横穴式前方後円墳が数多く築かれていました。現在五八基が残されその内の七基が松尾・毛賀古墳群としてここにあり、



飯田市上空から見た松尾地区

いずれも墳形から見て後期の形式のものといわれています。それほど当時から見ても魅力のある土地柄であったのでしょう。

鎌倉時代には、江馬北条氏の支配下に入り、特にここは重要な場所と目されていて、その創建になる鳩ヶ嶺八幡宮は現在も残されています。

室町・戦国の時代ともなれば、小笠原氏の本拠となり、南に毛賀沢川を望む台地上に松尾城が築かれ、その重要拠点でした。毛賀沢川を挟んで、対岸の台地上に一族の鈴岡城も築かれていて、長い間小笠原氏はこの地に拠っていたのです。それには、この島田を中心とした広くしかも生産力の高い水田地帯があったからこそでした。

領主が脇坂氏から堀氏へと移り変わっても、この村は飯田藩として利水・川除・新田開発・災害復旧などに、他とは比較にならないほどの力を注いでいます。それは飯田松川沿いから天竜川合流部にかけての地や、天竜川川除堤などに灌漑を多く注ぎ入れ、生産基盤の確保を図っているのを見ても良く分かります。

村高の様子を見ますと、天正一九年（一五九一）が二、〇三一石、正保二年（一六四五）が二、〇二八石、元禄一五年（一七〇二）二、〇三〇石、最後の天保五年（一八三

四)が二、四三二石と常に二、〇〇〇石以上を保っています。特に天保五年には以前に比べ約四〇〇石増になっていることは、藩が新田開発に力を入れてきた結果だといわれています。

現在は広々とした往年の大水田地帯にも工場が進出し、飯田のベッドタウンとして住宅も建ち並び、大きく変貌しています。

#### 四 小型村といわれた村々

##### 1. 小型村の範囲と位置

伊那谷は、大型村に比べると小型村の数はまことに多く、九九石以下の小型村は、江戸時代を通じて下伊那では約三〇%、上伊那では約一五%となっています。下伊那は上伊那に比べて、小型村が数のうえでも構成比の上でも断然多いことがわかります。

今回は一〇〇石以上は小型村の中には加えませんでした。が、上下伊那共一〇〇石より二五〇石の間の村数が非常に多く、これらは準小型村とでも言うことができるかと思えます。そしてこれは皆小さな谷々のまとまりにより村が構成されるという、伊那谷の特徴の一つといえることができます。

前の項の大型村は、天竜川の広い氾濫原や大型台地上の村々に多いことを見てきましたが、では、小型村は伊那谷のどのような所に位置しているのでしょうか。先ず特に小型な四九石以下の村々でその傾向を見ると次のようになっています。

\*上伊那分(単位石以下省略)

荊口(四五) 浦(三〇) 中山(三八) 西沢(三二) 松倉  
新田(八) 鑰掛(一) 雨沢(二七) 芝平(一九) ずみの  
木(一) 下新田(四七) 上新田(四六) 不動(無高)

これらは全部高遠領で、近藤領・幕府領・飯田領にはこのような小型村は含まれていません。これにより上伊那の地形の特徴をよく知ることができます。

\*下伊那分(単位石以下省略)

大鹿倉(七) 鷺津(三八) 千木(四〇) 月瀬(四一) 坂  
部(四五) 雲母(四〇) 尾科(四〇) 大屋敷(三七) 休  
戸(二七) 田本(四七) 市場(四一) 茶原(二四) 新井  
(二〇) 小松倉(二三) 大畑(三一) 大久那(一〇) ウ  
ルシ・平野(二三) 恩沢(三一) 鳥原(四二) 井戸(三  
八) 帯川(一〇) 日吉(二四) 安度(二七) 門島(三〇)  
稲伏戸(三五) 平野(二四) 怒田・たわ(一八) 柿野  
(二五) 鍛取(四八) 万場(四一) 田野口(三二) 怒

田(四一) 大平(四三)

となっており、正保二年(一六四五)には市瀬・清内路が、また元禄一五年(一七〇二)には、中山・長峰がそれぞれ無高村になっています。下伊那のこれらの特別な小型村は、天竜川東岸の南山郷と称された現在の泰阜村・飯田市千代を中心とする一帯と、その天竜川西岸から南方へ県境にいたる間の現在の阿南町の一部と天竜村内の村々が大部を占めています。それ以外に、大鹿倉は阿知村、大平は飯田より木曾に通ずる途中の大平宿で、無高の市瀬は同じ街道筋に接した所です。また無高の清内路は、これも木曾に通ずる清内路峠の街道筋にあり、長峰・中山は現在の松川町生田の内に所在していました。これらの小型村は、山間部に位置していたこともあり、年貢を榎木で納める御榎木成村が多かったことも特徴の一つといえると思います。下伊那における正保二年の知行割から一〇〇石以下の小型村を見ると次のようになっていきます(一部分割支配村を含む)。

代官 知久内蔵助分(幕府領) 一七ヶ村中一五ヶ村

代官 宮崎三左衛門分(〃) 四ヶ村中二ヶ村

代官 宮崎半左衛門分(〃) 六ヶ村中一ヶ村

脇坂淡路守分(飯田藩) 九八ヶ村中一六ヶ村

近藤織部知行所(旗本) 一八ヶ村中六ヶ村

井上頼母知行所(旗本) 二一ヶ村中一九ヶ村

知久内蔵助知行所(旗本・阿島) 五ヶ村中一ヶ村

右のほかには、五名の代官の知行所と、代官千村平右衛門領分、旗本小笠原鞠負(伊豆木)・座光寺善兵衛(山吹)の知行所には、このような小型村は含まれていません。

## 2. 小型村と一人百姓

伊那谷の本百姓の持高を見ますと、もちろん全国平均よりは小型であったと思われませんが、それでも各村で一〇〇石以上は持高の多い方です。一応村で上位にランクされるものは、少なくとも五〇石から七〇石以上でした。そうなってきましたとこれらの小型村では一本立ちの本百姓は自然に少なくなり、村高一〇〇石以下ともなりますと一人から三人くらい、一二〇石位の村でも二三人ということになるわけです。したがって一ヶ村に一人の本百姓の場合は、古くから一人百姓または一本百姓(一本免状)と呼ばれ、村の年貢を一人で全部納入していました。そして他の家はこれら一本百姓の小作人などであったのです。

またこれとは別に村の中で一戸だけ領主から直接扱われる本百姓も同じように呼ばれました。平凡社『長野県の地名』によりますと、一人百姓(一本免状)は、次の村々

であったとしています。

\*下伊那分( ) 内石数

金野(二九四) 柿野(六二) 黒見(二六一) 万場(九八) 門島(二二) 田野口(三二) 明島(一九〇) 芋平(二三九) 石林(六八)

\*上伊那分

高見(五六三) 高遠領中沢の内

また、『長野県史』に収録されている「弘化三年六月知久頼匡等宛勘定所阿部正備知行替村々引渡帳」によれば、打沢村に三人、平島田村に一人、今田村に二人、下村に一人の直接扱いの一人百姓があったことがわかります。そして文政四年(一八二一)、当時の今田村内、尾林村六左衛門などに、幕府からその理由を尋ねられ、これに対する「尋答書」も現在残されていて、その辺の事情を知ることができます。『長野県町村誌』の竜江村の項に、

「六左衛門、七郎左衛門、石林等を一人百姓と称え、各々主従ありて、一村一家の体をなす。今般合併以来(註：明治八年の合併を指す)初めて全村一体に帰す」

と、記されています。

これら一人百姓の成立は古く中世にさかのぼりますが、

旧くからその地を開拓して住み着き、地侍として兵農一体の生活がなされてきました。これが戦国時代も過ぎ、兵農分離がされた時、武士になって土地を離れる、ということができず、そこに土着したものが多くといわれています。したがって、その地所名を苗字に名乗る者もあり、親方(御館)・被官の関係もここより生れてきたわけです。

### 3. 連合村及び組合村

下伊那郡竜東の南部、通称南山といわれる地域は、余りにも村が小型であったため、村方三役を設置することさえでき兼ねるところが多くありました。それに領主・代官の側からも支配の便から、連合村や組合村が設けられていました。その主なものは、

連合村 大南山村(大南山六ヶ村) | 現泰阜村

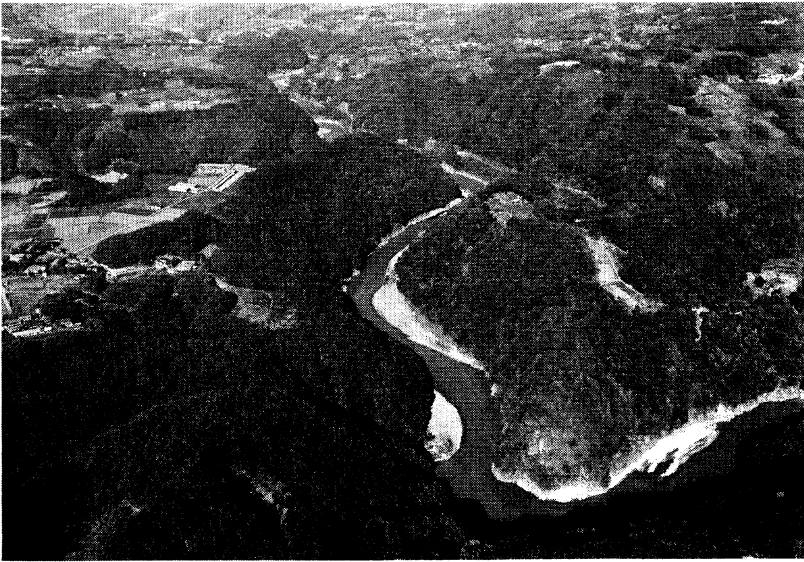
組合村 川手組・山手組 | 現泰阜村

下村組・尾科組・野池組 | 現飯田市

等でした。それではその内容を見てみますと、

\*連合村(大南山村)

この地域は現在の泰阜村の南部で、左京川より南の一带にあたります。中世末までは田本・野宇・茶原・市場・大畑・小松倉・新井・大久那・美佐野・温田・我科・漆平野



泰阜村

の一二ヶ村に別れていました。天正の検地におけるこれらの村の大きさは野宇以外は全部一〇〇石以下の小型村でした。その後、田本・野宇・市場・茶原が合併して田本村に、大畑・小松倉・新井・大久那が一緒になって大畑村となりました。これに美佐野・温田・我科・漆平野の四ヶ村が加わって、計六ヶ村が江戸時代初期に連合して大南山村と称するようになったわけです。

この大南山村における正保二年（一六四五）四月の石高をみますと、「大南山村（幕府領千村預かり）五九一石四斗八升一合」となっていて、連合することによって下伊那中央部の村々と凡そ村高が近似してきたことがわかります。寛文の頃（一六六一〜一六七三）になって、田本村と温田村の二ヶ村になったこともありましたが、元文五年（一七四〇）以後にまた前の六ヶ村に戻っています。村名は元禄に入り南山村と呼ばれるようになり、終始幕府領として変わることなく幕末まで続きました。

\* 組合村

山手組・川手組、これは現在泰阜村の北部になっていて、前の大南山村は終始一貫して幕府領であったのに対し、この地域の村々は幕府領・井上領・幕府領・飯田領・白川領（阿部氏）と転々と領主が変わりました。また幕府



領の時でも駒場・今田・飯島・福与・中関・御影新田と支配する代官所が変わっています。

それではこの組合村の天正検地の際の村高を見ますと、左京(九九石)金野(一六七石)が独立して記されているのみで、打沢他一ヶ村分(八六八石)はまとめて記されていますが、慶長六年(一六〇一)の様子を見えますと

山手組 打沢・怒田・鎌不取・左京・平島田の五ヶ村  
川手組 金野・唐笠・門島・悪島・黒見・田ノ口・平

野・万場・柿野・高町・稲伏戸の一ヶ村

に分かれていて、二ヶ村が増えていることがわかります。この組合村は元和五年(一六一九)から明暦三年(一六五七)までの井上領(約三八年間)の時代は、組合村ではなく、おのおの独立村の扱いであったといえます。この期間の正保二年(一六四五)四月の石高では、

金野(一六七) 左京(九九) 打沢(一九七) 唐笠(六五)  
五) 門島(三〇) 稲伏戸(三五) 黒見田口(一二二)  
悪島(一七七) 平野(一四) 高町(五二) 平島田(七二)  
怒田たわ(一八) 柿野(二五) 鎌不取(三二) 万場(四一)

となっていて、組合村としての機能は持っていませんでした。この山手・川手の両組の村数は途中で度々移動があり

ました。しかし、享和年間(一八〇一〜一八〇四)以降は旧に復して、山手五ヶ村・川手一ヶ村として幕末まで続きました。表一六「明治七年五月泰阜村合併時における一七ヶ村の様子」を見て頂きますと、一村中の戸数が一〇戸以下が七ヶ村もあり、小型村の実態をよく知ることができます。

またこの外に下村組・尾科組(尾林組)・野池組(米川組)などの組合村がありました。その夫々の所属を見ますと、

下村組 下村・毛呂窪・米峰・大郡  
野池組(米川組) 法全寺・山中・芋平・野池・萩坪・

田力・米川

尾科組(尾林組) 安戸・尾林・雲母・大屋敷・尾科・石林・宮沢

(註：『長野県の地名』(平凡社刊)では野池組・尾科組には『泰阜村誌』には米川組・尾林組になっている)となつています。しかし、今田村は大村であったためにこの組合村からは除かれています。

これらの村々は現在飯田市の内の、旧竜江村・旧千代村(千代村・千栄村)にあたる村々です。明治八年この三ヶ村の成立時の様子を見ますと、

表-6 明治七年合併時における旧17ヶ村の様子

旧村名	田 畑 面 積					戸 数	人 口
	町	反	畝	歩	厘		
平島	11.	1.	9.	23.		17	86
柿野	6.	1.	1.	27.		8	47
明島	18.	3.	7.	11.		28	167
平野	1.	0.	9.	20.		3	20
黒野	14.	5.	2.	19.		24	140
田の	3.	0.	8.	18.		3	20
唐口	9.	1.	0.	11.		13	70
門笠	2.	0.	5.	26.		4	20
万島	9.	1.	9.	24.		12	72
高場	5.	9.	7.	12.		8	26
金野	27.	5.	1.	19.		51	270
稲伏	7.	8.	3.	8.		23	138
打戸	20.	2.	5.	25.5		37	220
歙不	3.	7.	9.	9.		8	35
左取	4.	3.	9.	12.		9	53
京山	12.	4.	9.	18.		26	144
南	75.	2.	0.	10.		167	976
合 計	233.	7.	2.	22.5		441	2.504

註 南山村は6ヶ村連合村 (『秦阜村誌』より)

竜江村 今田・安度・尾林・石林・宮沢・雲母・大屋敷・尾科の八ヶ村

千栄村 下村・毛呂窪・米峰・大郡の四ヶ村

千代村 田力・萩坪・芋平・野池・米川・法全寺・山中の七ヶ村

が夫々当時の組合村毎に合併したことが分かります。これらは南山庄今田郷に入っていた村々ですが、今田郷はこれらの外に、前にお話した山手組の打沢・怒田と、川手組の番田(後に金野に含まれる)と高町が含まれます。

『長野県町村誌』の竜江村の項に、「今田郷を三部に大別して上中下三組となし、名主・組頭・百姓代などの里正ありて毎年更替す」とあります。これは現在秦阜村に入っている四ヶ村を除いた村々を、上中下の三組に分けて、村方三役は年番役で勤めたといっているのです、これが前述の野池組(米川組)・尾科組(尾林組)・下村組にあたるものでしょう。

伍 明治八年の合併

伊那谷は小型の村々の寄り集まりであることをお話してききましたが、江戸時代後期の「天保郷帳（一八三四）」によりますと、上伊那分は約二二ヶ村（但し高遠城下町を除く）、下伊那分は一六六ヶ村（但し飯田城下町を除く）の合計二八九ヶ村になっています。

それが明治元年（一八六八）、旧幕府領が伊那県（県庁飯島）にまとめられ、翌年の版籍奉還後、明治四年（一八七二）上下伊那は筑摩県に編入され、翌明治五年、筑摩県は県内を一九九小区に分け、翌六年に小区を統合して三〇大区にしました。続いて明治九年（一八七六）長野・筑摩両県を合併し、旧信濃国一國がまとめて長野県が誕生したのです。

『長野県町村誌・南信編』によれば、明治八年（一八七五）の町村合併による町村数は、上伊那郡は二町一三七ヶ村を二町二六ヶ村に、下伊那郡は一町一七八ヶ村を一町三一ヶ村にまとめています（表一七）。この時の概数は、旧貢米高四、〇〇〇石以上の大型村は下伊那に一ヶ村、それに次ぐ二、〇〇〇石以上も下伊那に一ヶ村で、上伊那には見当たりません。これについては後にふれますが、この大

表一七 上下伊那郡明治八年合併町村一覧（旧貢米高による）（ ）内は旧村数

	上 伊 那 郡 (計 2町26ヶ村)				下 伊 那 郡 (計 1町31ヶ村)	
4000石以上	0				1	信夫(6)
3000石以上	0				0	
2000石以上	0				1	上郷(6)
1000石以上	11	河合(7) 中沢(8) 伊那富(6) 赤穂(2)	富県(3) 南向(3) 中箕輪(9) 片桐(6)	東春近(6) 朝日(4) 西春近(5)	9	喬木(5) 久堅(6) 里見(8) 市田(6) 松尾(2) 伊賀良(6) 米川(4) 鼎(3) 上飯田(2)
500石以上	10	長藤(9) 沢岡(6) 三里(3) 飯島(1)	美鷲(6) 東伊那(6) 伊那(8)	伊那部(6) 東箕輪(5) 宮田(2)	8	生田(6) 神桶(5) 竜江(8) 泰阜(17) 三綱(3) 睦沢(6) 富草(13) 阿智(6)
300石以上	4	藤沢(6) 南箕輪(5)	長谷(4)	西箕輪(8)	4	千栄(4) 伍和(5) 陽阜(9) 大下条(14)
100石以上	3	東高遠(1)	西高遠(2)	小野(2)	7	大鹿(2) 遠山(4) 千代(7) 平岡(2) 旦那(5) 平波(2) 根羽(2)
100石以下	0				2	神原(4) 飯田町(1)

(『長野県町村誌』より)

型合併にはやや無理があったことがわかります。一、〇〇〇石以上、五〇〇石以上三〇〇石以上の項については上下伊那とも凡そ同じような村数になっています。しかし一〇〇石以上ともなりませんと、高遠町を別にすると上伊那では小野村のみですが、下伊那では七ヶ村、一〇〇石以下が一ヶ村あり、この段階になっても小型村が尚多いことがわかります。そして下伊那の地形の複雑さをつくづく知らされず。

全般的に上伊那はこの合併について下伊那ほどの無理はなかったように思えます。下伊那について特別なものを一部取り上げてみますと、貢米高四、〇〇〇石以上の信夫村は駄科・長野原・桐林・時又・上川路の旧五ヶ村と、高須領の旧下川路村が合併した村ですが、これは後に竜丘村と川路村に分かれました。又二、〇〇〇石以上の上郷村は、上黒田・下黒田・別府・南条・飯沼・座光寺の旧六ヶ村で構成されましたが、これも上郷村と座光寺村に分割しています。

喬木村を見ますと、この村は阿島(知久領)小川(幕府領)加々須(幕府領)富田(幕府領)伊久間(高須領)の旧五ヶ村を併せた村で、旧貢米高一、〇二石、人口は五、二五七人でした。ちなみにその時下伊那では飯田町が七、

六八二人で、五、〇〇〇人以上の村は上郷(五、〇三四人)と喬木村の二ヶ村のみであったのです。

喬木村はこの時、人口の上では下伊那第二の大型村でしたが、江戸時代には夫々領主の異なった村々を寄せ集めたので、どうも村民感情がしっくり行かなかったようで、明治一六年(一八八三)になって、ついに阿島は分離して独立村になりたいとして、「旧復分離願」を出しました。この願は却下されましたが、その翌年今度は阿島村・小川村・上小川村・富田村・伊久間村・喬木村(加々須・大島)六ヶ村の分村申請を出すまでに至りました。これも結局は許されず、やっと落ち着いて現在に至っているわけです。そして今なお他との合併を必要とせず、喬木村として存続している陰には、村民の結束を目標にしてきた先達の人々と、村民の不断の努力があったことを知らなければならぬでしょう。

信夫村・上郷村以外に、下伊那で合併後分離した村は、遠山村(和田・木沢・上・八重河内・南和田)、生田村(生田・河野)、久堅村(上久堅・下久堅)、里見村(大島・山吹)、米川村(山本・清内路)、阿知村(知里・会地)、平波村(平谷・波合)、且開村(且開・豊)などがあります。逆に合併した村は、千代村(千代・千栄)があ

り、そして大鹿村は明治一五年（一八八二）になって大河原村・鹿塩村に分かれましたが、同三年（一八九〇）再び合併しています。これを見ると、古い時代の村を新しくまとめることがいかに難しかったかを知ることができます。

また、秦阜村は旧一七ヶ村を、大下条村は旧一四ヶ村、富草村は旧一三ヶ村というように一〇ヶ村以上をまとめて一つの新しい村を構成していますが、上伊那ではこのような例は見当たりません（表一七）。

その反面、小型村でありながら地形の関係で大鹿村（旧二ヶ村）、平岡村（旧二ヶ村）、平波村（旧二ヶ村）、根羽村（旧二ヶ村）のように数少ない村の合併も行なわれています。そのうえ平波村のように後に分割して平谷・波合の二ヶ村となるわけで、ますます村の小型化が進んだことが分かります。神原村に至っては、旧四ヶ村を合わせて一村を立てても、旧貢米高が一〇〇石以下（六八石九斗）というわけですから、この時の合併によっても小型村という宿命からは抜けられなかったのです。

この町村合併から一三年後の明治二十一年（一八八八）四月一七日、市制町村制が公布され、この年の一〇月、県内の合併計画ができました。そして翌年の明治二十二年

四月一日、町村制が施行されて、長野県内合計三九一の新村村が発足しました。そのときの上下伊那郡の様子を見ますと、上伊那郡は二町二六ヶ村が一町二四ヶ村へとわずかながら合併は進んでいます。下伊那郡では一町三一ヶ村から一町四二ヶ村へと、逆に九ヶ村が増えて村の小型化が進みました。

#### 四、伊那谷における江戸時代末期の村

江戸時代の伊那谷は細かく分割して領有され、しかも複雑な移動があり、正確に全体を知ることにはなかなか難しい状況にあります。そのうえ小型村でありながら、知行者が複数になっているところもあり尚更です。

この項はそうの中から江戸時代末期を区切って、旧各村別の領有者を明らかにするためにまとめて見ました。上伊那郡については『上伊那郡史』を基本にして、『長野県町村誌』・『長野県の地名』（平凡社）などを参考にして検討してあります。ただし、『上伊那郡史』中の「上伊那郡内村別領主表」と、「上伊那郡各町村別石高概表」との間に同じ天保以降でありながら差異がありましたので、今回は前者を基にしてあります。

下伊那郡については『長野県町村誌』・『長野県の地名』



(平凡社) および関係市町村誌などを参考にまとめて見ました。しかし何分にも細かい区分ですので、不十分な点や誤りがあるのではないかと考えています。どうか以上のことを念頭において参考にしていただければ幸いです。

領有者区分

幕府領 支配代官所別又は預り藩名は省略

- 太田知行所(松島) 五、〇〇〇石
- 高遠領(内藤氏) 伊那領分 二八、五〇〇石
- 飯田領(堀氏) 一五、〇〇〇石
- 高須領(松平氏) 伊那領分 一五、〇〇〇石
- 白河領(阿部氏) 伊那領分 一三、〇〇〇石
- 小笠原知行所(伊豆木) 一、〇〇〇石
- 知久知行所(阿島) 三、〇〇〇石
- 座光寺知行所(山吹) 一、四〇〇石
- 近藤知行所(立石、後に山本) 五、〇〇〇石

表18 江戸時代末期領有一覧表  
上伊那郡

現市町村	旧町村名	旧村名(領有別)
辰野町	小野	小野・飯沼(幕府領)
川島	川島	雨沢(高遠領) 横川・上島(高遠領)
伊那富	伊那富	宮所・宮木・辰野・羽場・新町・北大出・今村(高遠領)
朝日	朝日	赤羽・沢底・樋口・平出(高遠領)
箕輪町	中箕輪	松島(幕府領)・太田知行所
箕輪	箕輪	沢・大出・八乙女・下古田・上古田・富田・中原新田・木ノ下(幕府領)
箕輪	箕輪	福与(太田知行所)
箕輪	箕輪	三日町(幕府領)
箕輪	箕輪	北小河内・長岡(幕府領)
箕輪	箕輪	南小河内(太田知行所)
東箕輪	東箕輪	北殿・南殿(幕府領)・太田知行所
南箕輪村	南箕輪	久保(太田知行所)
南箕輪村	南箕輪	大泉・田畑・神子柴(幕府領)
伊那市	西箕輪	吹上・中曾根・大泉新田・羽広・上戸・中条・与地・大董・寄合新田(幕府領)
伊那	伊那	御園・山寺・御舞瀬・荒井・小沢・平沢・横山・西町・日影・境・古町・狐島・上新田・下新田・上牧・野底(高遠領)
伊那	伊那	福島(幕府領)
伊那	伊那	野口・中坪・八手(幕府領)
伊那	伊那	下寺(太田知行所)
伊那	伊那	笠原・笠原南割・芦沢・末広・上大島・下大島・上川手・下川手・青島(高遠領)
伊那	伊那	上殿島・中殿島・下殿島・田原・榛原・原新田(高遠領)
伊那	伊那	福地・貝沼・新山(高遠領)
富県	富県	
東春近	東春近	





飯田市	千代	下村・毛呂窪・米峰・大郡(幕府領、但し天保より飯田領、弘化より白川領)
豊丘村	(千栄)	
河野	河野	河野(知久知行所)
神稻	神稻	田村(知久知行所)
番木村	番木	伴野・壬生沢・福島(高須領)
清内路村	清内路	林(幕府領)
阿智村	会地	小川・加々須・富田(幕府領)
阿智村	会地	阿島(知久知行所)
阿智村	会地	伊久間(高須領)
阿智村	会地	清内路(幕府領)
阿智村	会地	上中間(幕府領)
阿智村	会地	中関・駒場・上下両町・大野分(幕府領、但し弘化元年より飯田領、弘化三年より白川領)
阿智村	会地	小野川・昼神(幕府領)
阿智村	会地	向間・備中原・大鹿倉(幕府領)
阿智村	会地	河内・栗矢野(近藤知行所)
阿智村	会地	阿知原・親田・山田河内(高須領)
阿智村	会地	粒良脇・小松原・大久保(近藤知行所)
阿智村	会地	入野・鎮西野・下新井・山田河内(高須領)
阿智村	会地	合原・北又(近藤知行所)
阿智村	会地	仁王関・菅野・吉岡(幕府領)
阿智村	会地	元川田・神子谷・中谷御供・大森平石・大平大那木・深見・千木・小野・平久大窪・和知野・早稲田・井戸・田上吉田・小中尾(高須領)
阿智村	会地	大島・恩沢・大平・梅田・鴨目(近藤知行所)
阿智村	会地	雲雀沢・古城・粟野・浅野・鷺津・門原・新木田(高須領)
阿智村	会地	新野(高須領)
阿智村	会地	帯川・和合・日吉(幕府領)
阿智村	会地	売木(幕府領)
阿智村	会地	波合(幕府領)
阿智村	会地	平谷(幕府領)

根羽村	根羽	根羽・月瀬(幕府領)
天竜村	神原	坂部・向方・福島(幕府領)
泰山村	平原	満島・長沼松島・鶯巢(幕府領)
上村	上村	南山(田本・野宇・大畑・美佐野・温田・我科・漆平野(幕府領))
南信濃村	上村	金野・高町・唐笠・黒見・平野・万場・田野口・柿野・平島田・門島・明島・稻伏戸・打沢・鍛不取・怒田・左京(幕府領、但し天保より飯田領、弘化より白川領)
上村	上村	上村(幕府領)
八重河内	八重河内	八重河内・和田・南和田(幕府領)
木沢	木沢	木沢(幕府領)

おわりに

伊那谷はその地形的制約を受けて小型村の集まりであったことをお話してきました。しかも徳川幕府はこれを細かく分割して支配し、なおその上領有が散在し、入り組んだ構成になっていました。極端な場合には、水田と水田の間を流れる溝川が境となつて支配者が異なっていることも珍しいことではありませんでした。支配者が異なればその治水政策も異なり、水系全体で一貫した治水策が取られることはありませんでした。その境のあちらとこちらでは年貢の量にも差異が見みられ、お互いの利害も対立しました。江戸時代の約二八〇年という長い間、このような状態が続いたわけですから、隣接の村民同士がうちとけて暮していくことはなかなか難しかったわけです。このように百姓が大きく団結できないような意識を培っていくことも、当時の封建社会を維持していくためには必要なことであつたでしょう。明治維新以来約六〇年を経過した昭和の初期でも、なおこの風潮は残っていて、天竜川を挟んで子供同士が石の投げ合いをやり、それを大人が応援したことがあつた程でした。したがって、大雨・大洪水ともなれば、対岸の堤防が流失すれば自分たちの護岸は助かるという意識は

まだ強く残っていました。

それが大きく変わったのは太平洋戦争を境にして本格的な民主主義の台頭があり、また、伊那谷の意識を一段と変えたのが三六災とその復興であつたと思います。人間の生活や、その中で養われる意識はそう簡単に変わるものではなく、長い年月をいろいろな出来事の積み重ねにより変革されていくものであることを知らされず。

よく「伊那人気質」ということを言われます。これについて、上伊那の向山雅重先生は『伊那の風土と人』（一九八一・北原技術事務所）の中で分析してまとめられています。それを見ますと、地形的・気候的な面から見ると、「天竜川が暴れさえしなければ」人間が暮すには割合良い条件が整っており、そのために「のんびりしたところがあり、努力に欠け、セツパ詰まったところが無い」。歴史的に見ても、武力で統一したのは武田信玄くらいで、皆小さな谷々や盆地の安全地帯の中で「我こそは」という人間がお互いに押し合いへしあい、足を引っ張りあい、どんぐりの背比べをしてきたといっておられます。そんなところが他の地域の人々から見れば「伊那モンロー」または「伊那谷は閉鎖的だ」と言われたのでしょう。

別の見方をすれば、地域の人々が他を頼まず、結束して



年表

年号	西暦	事項
大化 二	六四六	改新の詔宣せらる。郡制により科野国伊那郡設置さる。郡の下に五〇戸で編成の郷をおくも、この頃の伊那郡の郷名は不明である。
文武 四	七〇〇	科野国に諸牧が開かれる。
和銅 六	七一三	諸国郡郷は好字制により改められ、科野国は信濃国となる。
天平 一〇	七三八	正倉院宝物布袋墨書により伊那郡小村郷のこと判る（交易布一段納入）。
承平 七	九三七	源順、承平年間に「倭名類聚鈔」を編纂。これにより伊那郡中の郷名が判明す。
天曆 九	九五五	信濃国の農村も竪穴住居と共に掘立柱建物が一般的となる（伊那郡の農民もこの頃から掘立柱の建物に住むようになったのであろう）。
保延 二	一一三六	伊那郡宮田村は政府の御布所に指定され、布を納める代わりに諸税を免除さる。
文治 元	一一八五	平家滅亡。鎌倉幕府は全国に守護・地頭を設置。頼朝は小笠原の祖加々美遠光を信濃守に任命。
建久 三	一一九二	頼朝、征夷大將軍に就任。
建長 四	一二五二	伊那郡春近領内の小井互二吉郷における田境争論裁決あり。
元弘 五	一二五三	藤原兼経の所領目録中に伊那郡落原莊、郡戸莊の名あり。
建武 元	一三三三	北条高時が自刃し、鎌倉幕府亡ぶ。
延元 元	一三三四	建武中興。
興国 五	一三三六	藤沢行親、箕輪六郷六〇〇貫を賜り、この地に封ぜられると伝う。
明応 二	一三四四	宗良親王、伊那郡大河原へ寄留。小笠原貞宗、信濃守護職と伊賀良莊をその子政長に譲る。
天文 一	一四九三	松尾の小笠原定基、鈴岡の信濃守護小笠原政秀父子を誘殺。以後府中の小笠原長朝等定基と交戦し、信濃の戦国時代の開幕となる。
	一五四二	武田信玄、諏訪を平定。



寛文	一二	一六七二	飯田藩主脇坂安政、播磨国竜野へ転封。代わって下野国烏山より堀親昌二万石で入封。堀領以外の旧脇坂領は幕府領となる。
延宝	元	一六七三	高遠領藤沢郷一三ヶ村の百姓窮状を訴える。
天和	元	一六八一	松平義行、新規大名に取り立てられ、三万石のうち伊那幕府領より一万五〇〇石余。代官所を竹佐村（飯田市山本）に置く。
元禄	二	一六八九	高遠藩主鳥居忠則、改易。
	三	一六九〇	松代藩に命じ高遠領検地条目により高遠領の総検地を行なう。
	四	一六九一	内藤清枚、摂津富田より高遠領三万三〇〇〇石で入封。
正徳	五	一七一五	天竜川水系に大洪水（正徳の未満水）。
元文	四	一七三九	高遠藩この年より領内に定免制を施行。
	五	一七四〇	昨年の高遠藩にひきつづき信濃諸藩が定免制を施行。
寛保	三	一七四三	松本・佐久・小県・伊那の幕府領一五九ヶ村が松本藩の預かりとなる。
宝暦	二	一七六二	飯田領に「千人講騒動」起きる。
安永	八	一七七九	高遠藩に安永の藩内騒動起きる。
天明	六	一七八六	当年雨多く、夏冷気にて大凶作となり郡民大いに飢え、飯田に米騒動起きる。
文化	六	一八〇九	飯田に紙問屋騒動起きる。
文政	五	一八二二	高遠藩に「興津騒動」起きる（興津紋左衛門のわらじ・木綿課税に反対の農民蜂起）。
天保	三	一八三二	天保の大飢饉始まる。伊那の伝兵衛堰開削。
	五	一八三四	諸国大飢饉。水野忠邦、老中になる。
	二	一八四一	天保の改革始まる。松代藩主真田幸貫、老中に就任。
	四	一八四三	飯田藩主堀親憲、老中格に登用。七〇〇〇石を増され、二万七〇〇〇石となる。天保の改革失敗。水野忠邦、老中を罷免される。
弘化	二	一八四五	飯田藩は一万石を幕府に没収され、一万七〇〇〇石となる。
	三	一八四六	旧飯田藩領市田村等一万三〇〇〇石余、白河阿部氏領となる。市田原町に陣屋を置く。

安政	四	一八五七	嘉永五年に始まった「阿島（知久家）騒動」、六年目に終結す。
元治	六	一八五九	白河領南山郷農民、年貢の幕府領相場への減免に成功（南山騒動）。
慶応	元	一八六四	第一次長州征伐。高遠藩出兵。水戸浪士隊、伊那・飯田を通過。飯田藩二〇〇〇石を幕府に没収され、遂に一万五〇〇〇石となる。
明治	三	一八六五	第二次長州征伐。高遠藩出兵を命ぜらる。飯田町で米屋二三軒の打ち壊しあり。
	元	一八六七	徳川慶喜大政奉還。朝廷王政復古の大号令を発す。
	二	一八六八	鳥羽伏見の戦。江戸城開城。天竜川大洪水（七月辰の満水）。旧幕府領を県域として伊那県を設置（県庁飯島）。会津若松城落城。東北地方平定さる。九月八日明治と改元。
	四	一八六九	函館五稜郭開城。戊辰戦争終る。飯田に二分金騒動。高遠入野谷騒動起る。版籍奉還。
	五	一八七一	廃藩置県。上下伊那全郡、筑摩県に属することとなる（伊那県と飯田・名古屋・高遠等の知事は免官となる）。
	六	一八七二	筑摩県庁を松本に開庁。土地永代売買の禁を解く。庄屋・名主等を廃し、戸長（正副）をおく。
	七	一八七三	筑摩県内を一九九小区に分ける。田畑の貢租米をすべて金納化する。
	八	一八七四	地租改正に着手。筑摩県は小区を統合して三〇大区とする（三〇大区一九九小区）。
	九	一八七五	町村統合について筑摩権令より強い指導が行なわれ、各村より統合について上申書を提出。
	二一	一八七六	第一回の町村の統合合併が行なわれ、新しい町村が発足。
	二二	一八七八	筑摩県を廃し、飛騨は岐阜県に、他は長野県に合併。旧信濃国が長野県としてまとまる。大区の呼称には旧長野県には北を、旧筑摩県には南を冠することとなる。
		一八八九	市制・町村制公布。一〇月に県内の合併計画できる。
			四月一日、町村制施行。上伊那一町二四ヶ村、下伊那一町四二ヶ村として発足。

**松澤 武** (まつざわ たけし)

大正13年下伊那郡喬木村伊久間に生れる。  
旧制東京高等農林学校獣医科卒業。  
昭和27年より県内高校の教師を歴任し、昭和59年退職。

著書

『伊久間地先に於ける天竜川の変遷』他。

共著

『天竜川流域の暮しと文化』へ「上流域の水害と治水」  
(磐田市史編纂委員会編)

---

**天竜川流域の村々**

平成2年3月15日 発行

企画発行	建設省中部地方建設局 天竜川上流工事事務所	長野県駒ヶ根市上穂南7-10 〒399-41 ☎0265-82-3251
著者	松澤 武	長野県南安曇郡豊科町本村 〒399-82 ☎0263-73-2081
編集	(有)北原技術事務所	長野県南安曇郡豊科町高家5279 〒399-82 ☎0263-72-6061
印刷	双葉印刷(有)	長野県松本市城東2-2-6 〒390 ☎0263-32-2263

---



## 「語りつぐ天竜川」の発刊にあたって

天竜川は独特の形態をもつ河川です。上流部は諏訪湖が洪水を調整して比較的穏やかな表情をしていますが、後背に多雨域をもつ三峰川・小渋川・太田切川などの支川を合流するたびに、洪水とともに大量の土砂を受け入れて一気に急流土砂河川の様相を呈し、途中多くの狭窄部の間に氾濫原を形成してきています。

一方、この氾濫原は伊那谷の穀倉地帯でもあり、地先の人々は出水ごとに溢流する天竜川との間に涙ぐましい闘いを繰り返してきました。反面、天竜川は母なる川として地域の人々の生活を支え潤してきました。田畑を灌漑し、漁獲をもたらし、山深い信州と他国を結ぶ物資の交流の場でもありました。情操のうえでも深い関わりがあり、独特の風土や文化を育んできました。伊那谷の風土は天竜川と無関係ではあり得ません。今後とも、天竜川を危険なものとして遠ざけたり、水があるからといって過度に取水したり、汚したりすることは避けねばなりません。

この天竜川を鎮め、水を高度に利用するための地元の長い営みの後を受けて、昭和12年から砂防を、昭和22年から河川を国が直轄事業として取り組むようになり、その間地域の皆様からの多大なご協力のもとに、天竜川の安全性は格段に向上しました。しかし安心は出来ません。絶えず流域の変貌をみつめ、河川施設の整備と維持管理を図っていかねばなりません。また、水害防止と利水に一応の成果をみた現在、地域にとって望ましい天竜川の姿を考え、その方向に向けて管理してゆくことがこれからの課題であると考えます。

「語りつぐ天竜川」は、天竜川の治水に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の方に天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立ちたいと考え発行するものです。

なお、ご執筆いただいた方々には、自由な立場からお考えを披瀝していただいていますので、建設省の見解とは異なる場合がありますことを付言します。

建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所  
所長 北川 明

## 「語りつく天竜川」目録

- |                             |        |
|-----------------------------|--------|
| 1. 伊那谷の気象                   | 米山啓一著  |
| 2. 天竜川上流域の立地と災害             | 北澤秋司著  |
| 3. 天竜川に於ける河川計画の歩み           | 鈴木徳行著  |
| 4. 総合治水の思想                  | 上條宏之著  |
| 5. 総合治水と森林と                 | 中野秀章著  |
| 6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷          | 松澤武著   |
| 7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷           | 今村真直著  |
| 8. 村境は不思議だ                  | 平沢清人著  |
| 9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷         | 倉沢秀夫著  |
| 10. 諏訪湖の御神渡り                | 米山啓一著  |
| 11. 理兵衛堤防                   | 下平元護著  |
| 12. 近世 天竜川の治水 — 伊那郡松島村 —    | 市川脩三著  |
| 13. 川筋の変遷 — 天竜川と三峰川の場合 —    | 唐沢和雄著  |
| 14. 伊那谷山岳部の降雨特性             | 宮崎敏孝著  |
| 15. 天竜川の橋                   | 日下部新一著 |
| 16. 伊東伝兵衛と伝兵衛五井             | 北原優美編  |
| 17. 天竜川の魚や虫たち               | 橋爪寿門著  |
| 18. 天竜川のホタル                 | 勝野重美著  |
| 19. 天竜川流域の村々                | 松澤武著   |
| 20. 小渋川水系に生きる — 人と水と土と木と —  | 中村寿人著  |
| 21. ものがたり 理兵衛堤防             | 森岡忠一著  |
| 22. 量地指南に見る 江戸時代中期の測量術      | 吉澤孝和著  |
| 23. 土木技術と生物工学 — 生きものを扱う技術 — | 亀山章著   |

(以上既刊)